

# 秦泉寺廃寺（第5次調査）

—— 店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

附 高知城北側外堀石垣の調査

2002. 3

高知市教育委員会

# 秦泉寺廃寺(第5次調査)

——店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

附 高知城北側外堀石垣の調査

2002. 3

高知市教育委員会

## 序

秦泉寺廃寺は現在高知市内で確認されている最も古い古代寺院跡で、高知県内でも最古級の寺院跡です。高知市教育委員会では、これまでに地元の方々の協力を得て3回の発掘調査を行ってきました。その他に(財)高知県立埋蔵文化財センターによる発掘調査も行われ、寺院跡についての詳しい内容が少しづつ明らかになってきました。しかしながら、寺域が広大なため未だ全容をつかむまでには至っていないのが現状です。

今回の報告書は平成10年に行われた発掘調査の報告書です。昭和58年に行われた第3次調査のすぐ南隣にあたり、それとの関連も予想されました。結果として、古代の掘立柱建物跡や寺院に関連すると思われる遺物等が発見でき、いくつかの貴重な成果を上げることができました。

今回の報告書には秦泉寺廃寺の調査の他にもう一つ、同じ年に行われた高知城跡の報告も併せて掲載しました。対象地は江ノ口川護岸、高知城橋南詰付近で、国の史跡の区域からははずれますが、旧江ノ口川が高知城の外堀として利用されていた部分の一部です。秦泉寺廃寺とは違う時代の遺跡ですが、ほぼ同時期に行われた調査ということで、併せて報告します。

この報告書が、秦泉寺廃寺ならびに高知城跡に関しての理解を深める一助となれば幸いです。最後になりましたが、調査に関わられた方々にお礼申し上げるとともに、関係諸機関のご理解とご協力に感謝申し上げます。

平成14年3月

高知市教育委員会

## 例　　言

1. 本報告書は高知県高知市秦に所在する「秦泉寺廃寺」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は高知市教育委員会が主体として行い、掘削・現場管理については高知市農業協同組合が共運工業有限会社に委託した。
3. 発掘調査は1998年6月1日から8月5日まで行った。整理作業は現場終了後、2002年3月まで行った。遺物及び諸記録は高知市教育委員会で保管している(遺物の注記はJT-98とした)。
4. 現地調査の体制は次の通りである。

調査員	田上 浩
測量補助員	森岡和信
5. 本書の執筆及び編集は田上が行った。また、整理作業・編集に大賀幸子の協力を得た。
6. 発掘調査にあたっては磁北をもとに任意座標を設定し、使用した。
7. 発掘調査及び整理作業において下記の方々の協力を得た(順不同・敬称略)。

発掘作業 足達智代、池田久利、川田由美、島津清代香、島津忠利、下元博路子、  
松田修昌  
整理作業(遺物実測・拓本) 松田重治、田所希代江
8. 発掘調査並びに報告書作成に当たり、高知県教育委員会及び財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏から多くの助言、教示を賜った。記して感謝したい。

# 本文目次

## 秦泉寺廃寺(第5次調査)

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 遺跡の立地及び付近の遺跡	1
第3節 これまでの秦泉寺廃寺の調査	3
第2章 調査の方法	
第1節 調査区の設定及びグリッド	5
第2節 多角測量成果	5
第3節 方位測量成果(磁北)	6
第4節 調査の手順	6
第3章 調査の成果	
第1節 基本層序	9
第2節 検出遺構と出土遺物	
(1)掘立柱建物跡	12
(2)その他の遺構	15
第3節 包含層出土遺物	20
第4章 まとめ	
(1)遺物	26
(2)遺構	27
(3)補足事項	30
高知城北側外堀石垣の調査	53

# 挿図・表目次

## 秦泉寺廃寺(第5次調査)

図1 周辺の遺跡及び今回の調査対象地位置図(縮尺1/50000:1/5000)	2
図2 1区・2区完掘全図(縮尺1/100)	7
図3 1区土層断面図(縮尺1/80)	10
図4 2区土層断面図(縮尺1/80)	11
図5 SB1・SB2の平面図・断面図(縮尺1/100)	13
図6 SB3・SB4の平面図・断面図(縮尺1/100)	14

図7 SB5・SB6の平面図・断面図(縮尺1/100).....	16
図8 SK4・SK2の遺構図:SK3・P2の遺物出土状況図(縮尺1/40:1/20).....	18
図9 遺構出土遺物実測図(縮尺1/3).....	19
図10 包含層遺物出土状況図(縮尺1/20).....	21
図11 包含層出土遺物実測図(須恵器、縮尺1/3).....	22
図12 包含層出土遺物実測図(凹石・土師器・弥生土器、縮尺1/3).....	24
図13 出土瓦拓影及び断面図(縮尺1/5).....	25
図14 1~5次調査検出遺構仮集成図(縮尺1/400).....	28
出土遺物観察表 須恵器・土師器・弥生土器1 .....	32
出土遺物観察表 須恵器・土師器・弥生土器2、瓦類・凹石 .....	33
高知城北側外堀石垣の調査	
図15 調査対象地位置図(縮尺1/5000: 1/500) .....	54
図16 石垣側面図・正面図(縮尺1/20) .....	55

## 写真図版目次

### 秦泉寺麻寺(第5次調査)

写真図版1 対象地全景、1区東壁 .....	35
写真図版2 1区完掘状況、2区完掘状況 .....	36
写真図版3 SK2東壁、SK4東壁 .....	37
写真図版4 図12-No.65出土状況、図11-No.55・図12-No.58出土状況 .....	38
写真図版5 図12-No.64出土状況、図11-No.56・図13-No.69・No.73出土状況 .....	39
写真図版6 図10-No.23・No.24出土状況、図11-No.40出土状況 .....	40
写真図版7 図13-No.72・No.74出土状況、SK3(図10-No.18)・P2出土状況 .....	41
写真図版8 出土遺物(1~10) .....	42
写真図版9 出土遺物(11~20) .....	43
写真図版10 出土遺物(21~30) .....	44
写真図版11 出土遺物(31~38、40) .....	45
写真図版12 出土遺物(39、41~49) .....	46
写真図版13 出土遺物(50~59) .....	47
写真図版14 出土遺物(60~68) .....	48
写真図版15 出土遺物(69~71) .....	49
写真図版16 出土遺物(72~74) .....	50

### 高知城北側外堀石垣の調査

写真図版17 石垣側面、石垣正面 .....	57
写真図版18 石垣撤去後全景、石垣撤去後側面 .....	58
写真図版19 脇木検出状況、脇木検出状況(拡大) .....	59

## 秦泉寺廃寺（第5次調査）

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経過

秦泉寺廃寺は高知市秦地区に所在し、高知県内でも最古級の寺院跡として知られている。遺跡内ではこれまでに数次の調査が行われており、白鳳期に創建された寺院跡であることが想定されている。

平成9年度に高知市農業協同組合より、同組合秦文所移転・新築の計画における文化財保護法上の手続きについての照会があった。高知市教育委員会では、計画地は遺跡の範囲内であり、北隣の高知市秦文化センターの建築時にも事前の発掘調査が行われ、一定の成果が得られていることから(第3次調査)、今回の計画については事前の試掘調査が必要であり、さらに試掘調査において遺跡が発見された場合には記録保存のための発掘調査が必要であるという回答を行った。その後平成10年度に正式な届け出が提出されたのを受けて、高知県教育委員会の指導のもと両者で協議を行い、既存する工場の解体終了後に計画地について試掘調査を行うことになった。試掘調査は平成10年5月11日～5月14日の4日間の日程である。

試掘調査の結果、対象地のほぼ全面において寺院の存続期に属するとみられる遺構及び遺物が確認されたため、再度協議の結果、対象地のうち工事によって破壊される建物の基礎部分約350m<sup>2</sup>について事業主の費用負担のもと、記録保存のため事前の発掘調査を行うことになった。調査は以下の体制で行われた。

事業主体 高知市農業協同組合

調査主体 高知市教育委員会

事務全般 依光桃子(高知市教育委員会社会教育課主査)

現地調査 田上 浩(高知市教育委員会社会教育課指導主事)

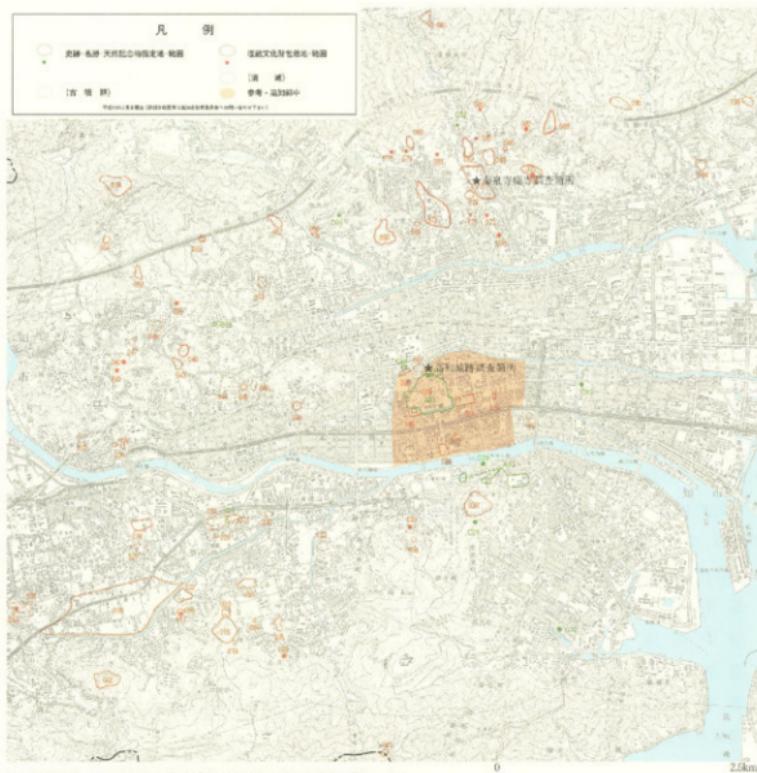
現地調査期間 平成10年6月1日～8月5日

## 第2節 遺跡の立地及び付近の遺跡

高知市の中心域は北方・西方・南方を小丘陵に囲まれた盆地状の中央低地の上に形成され、東方は孕門を割って南から湾入する戸浦湾を通じて開かれている。この中央低地の開発は、低地西端に北方から流入する鏡川、及びその他の中小河川によって形成された周辺の扇状地から始まったと考えられる。遺跡の所在する秦地区は、北方の山地から南流し久万川に注ぐ名切川・金谷川・東谷川等によって複合して形成された扇状地上に立地している。

秦泉寺廃寺付近において旧石器時代以前の遺跡は未だ発見されていないが、縄文時代になると約700m西北方に宇津野遺跡があり、磨製石斧・蔽石等が出土している。また、弥生時代の遺跡としては有柄石剣の出土した北秦泉寺遺跡があるが、この地域の遺跡が増加するのは古墳時代以降である。

古墳時代の遺跡は現在のところ西秦泉寺遺跡のみしか知られていないが、後期古墳は付近に少な



国土整理院発行の1/25000地形図に基づく「高加市遺跡地図」(平13年版第82号)の一部を  
1/50000倍尺に複製。使用地図番号: いの〔高加11号-2〕、こうら〔高加7号-1〕

番号/地図名	種別	時代
A402 高加城跡	城跡地	近世
C002 古墳古墳	古墳	古墳
D067 尾ノ瀬塚	空跡	近世
G79 受石不動堂跡古墳	古墳	古墳
G71 勝手小学校附近古墳	古墳	(前漢)
G72 愛宕神社裏古墳	古墳	古墳
G73 西条慈寺遺跡	歴史地	古墳
G74 勝手赤羽塚跡	城跡地	中世
G75 勝手寺発寺	寺院跡	古代
G76 土塁の前古墳	古墳	(前漢)
G77 前里城跡	城跡地	中世

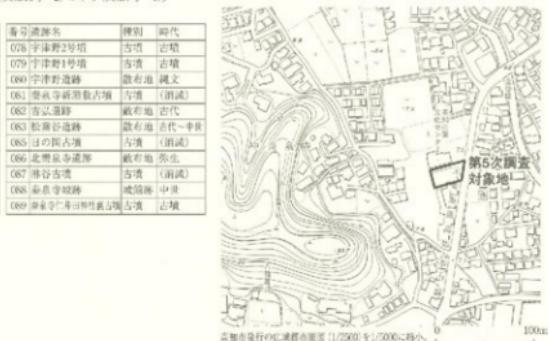


図1 周辺の遺跡及び今回の調査対象位置図

からず存在が確認されている。宅地化の進展とともに、すでに半数は消滅しており、所在した場所も明らかでないものもあるが、北部丘陵山麓には西から宇津野の1・2号墳、中秦泉寺の新屋敷古墳、北秦泉寺の吉弘古墳・日の岡古墳・仁井田神社裏古墳・淋谷古墳、東秦泉寺の土居の前古墳、南方の愛宕山付近には愛宕不動堂前古墳・秦小学校校庭古墳・愛宕神社裏古墳・愛宕山上古墳等12箇所が知られており、市内でも古墳の集中している地域になっている。その内でも吉弘古墳は石室や墳丘が比較的よく残存しており、高知市史跡に指定されている。このような古墳群の築造に関わった集団と秦泉寺廃寺の造営に関わった集団との間には、何らかのつながりがあることが想定されるものの確定的なことはまだはっきりとしていない。

古代の秦地区は土佐郡五郷の内土佐郷或いは高坂郷の一部と考えられ、松葉谷遺跡・吉弘遺跡等が秦泉寺廃寺の北側に所在している。また、朝倉地区等に顕著にみられる推定条里製造構や、養老期以前の南海道が存在していた可能性もあるが、その痕跡は現在では全く確認できないのが現状である。中世以降では、現在のところ平地遺跡は確認されていないが、中世の山城として秦泉寺城跡・前里城跡・秦泉寺別城跡等が付近に所在している。

なお、周辺の遺跡一覧表中で尾戸焼窯跡及び高知城跡は、本報告書後半の「高知城北側外堀石垣の調査」に関連するものである。

### 第3節 これまでの秦泉寺廃寺の調査

秦泉寺廃寺は高知市中秦泉寺字鍛冶屋ヶ内・鷹通に所在する。長宗我部地検帳(天正16年秦泉寺郷地検帳)をみると、下の通り、「カチヤカ内」→「□内」→「寺内」→「タカトリ」の順にホノギが記載されており、現在の小字との関連から秦泉寺廃寺の推定区域に重なること、また、現在区域内に通称「カネツキ堂」の地名が存在すること等の傍証はあるものの、この地に寺院が存在したことを示す確実な古記録等は存在していないため、地名をとて「秦泉寺廃寺」と呼称されている。地検帳のうち関連部分は次の通りである(長宗我部地検帳土佐郡上194~195頁から一部を改変抜粋)。

カチヤカ内	中	中島監物給	与一衛門作
同しノ東前一反地	中	岡上吉介給	善助作
同しノ東	中	中島殿分	奎衛門作
同しノ北	中	福留千楠丸給	次郎五郎作
□内	下々ヤシキ	窪添彦丞給	主作
同しノ東	下々ヤシキ	永吉与衛門尉給	新衛門居
寺内	四十代・皆荒	龍泉庵分	
同しノ南	荒・下	福留千楠給	惣衛門作
同しノ西東ノ小田共ニ	荒・下ヤシキ	秦泉寺左近給	喜左衛門作
同しノ南	下	秦泉寺左近給	喜左衛門作
同しノ窪	下・荒	福留清兵衛給	久左衛門作

同しノ南	下・荒	中間藤兵衛給	主作
同しノ東	二十代・皆荒	龍泉庵分	
同しノ南ノ窪	下々・荒	福重七郎衛門尉給 李衛門作	
タカトリ	下・荒	吉村宗助給 五郎左右衛門作	

以上のように検地当時には寺院は廃絶していたらしく、ホノギ以外に寺跡を推定できる記述は残っていない。ただし、龍泉庵分と記載された荒蕪地が合計1反10代存在しており、寺跡に関連する可能性はあるが、7～9世紀と推定される寺院跡が16世紀の後半まで、何の土地利用もされず存続していたとは考えにくく、寺院との関連を論ずるならば、第4次調査の報告書〔山本 1994〕において可能性が指摘された中世寺院との関連を考えた方が良さそうである。また、寺院の性格についても、「秦」地名や高句麗の要素を持つ鐘瓦から秦氏の氏寺であるとも考えられ、また土佐郡でもっとも古い寺院であることから郡寺の性格をもっていたとも考えられるが、定説はない。

秦泉寺で古瓦が採取されることを古くから知っていたらしく、皆山集にもその旨の記載がある。また、大戦中の1940年に長岡元康・山本淳両氏らによって発掘調査が行われており、蓮華文鐘瓦・巴文鐘瓦・重弧文字瓦等が発見されている。1970年代後半から周辺の都市化に伴って、開発前の緊急調査としてやや規模の大きい調査が行われるようになった。以下に概要を示す。

・第1次調査 秦泉寺廃寺発掘調査団、1975.10.28～11.1、約100m<sup>2</sup>

検出遺構 推定講堂跡基壇、単廊、雨落溝等

出土遺物 重弧文字瓦、須恵器高坏等

・第2次調査 秦泉寺廃寺発掘調査団、1977.1.25～28、約250m<sup>2</sup>

検出遺構 推定金堂跡、単廊、廻廊、雨落溝等

出土遺物 重弧文字瓦、蓮華文鐘瓦、須恵器坏等

・第3次調査 秦泉寺廃寺跡発掘調査団、1983.3.12～4.21、約840m<sup>2</sup>

検出遺構 掘立柱建物跡、大溝、瓦だめ、柵列、不整形土坑など

出土遺物 鐘瓦(素弁・単弁・複弁蓮華文)、宇瓦(重弧文)、男瓦、女瓦

鬼瓦(鷲尾の可能性あり)、須恵器、土師器等

遺跡の存続時期を白鳳～奈良時代の1、2期(寺院存続期)と平安時代以降の3～5期

(寺院衰退期)に時期区分

・第4次調査 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター、1991.8.6～23

1992.1.10～3.25、1992.6.23～7.13、1993.4.19～9.30、計約80m<sup>2</sup>

検出遺構 掘立柱建物跡、柵列、溝跡、不整形土坑等

出土遺物 須恵器、土師器、女瓦、宇瓦(新たに四重弧)等

第1次・第2次調査での検出遺構が中世寺院のものである可能性を示唆。

・第5次調査 高知市教育委員会、1998.6.1～8.5、約350m<sup>2</sup>(今回調査)

・第6次調査 高知市教育委員会、2000.9.29～12.28、約1600m<sup>2</sup>(整理作業中)

以上である。

## 第2章 調査の方法

### 第1節 調査区の設定及びグリッド

調査対象地は、県道高知本山線の西側に面しており、第3次調査対象地の南に接している。現況は旧水田の上に0.8m程度の盛土が存在し、調査の直前まで工場として利用されていた。盛土から下の部分については、一部に擾乱は見られるものの相対的に安定した地層が残っている。

試掘調査については、敷地境界線に沿って幅3mのトレーナーを南北にTR1(長さ9m)、東西にTR2(長さ17m)の2本を設定して調査を行った。両方のTRとも本調査の範囲とはほぼ重なるため、検出遺構・出土遺物については本調査とまとめて報告する。

本調査については、対象地内で土置き場を確保するために東西の二つの調査区に分けて調査を実施した。はじめに西側の第1区を調査し、1区を埋め戻した後に東側の第2区の調査を行った。調査面積は1区約172m<sup>2</sup>、2区約178m<sup>2</sup>、合計約350m<sup>2</sup>である。

次に基準グリッドについて述べる。調査対象地は狭小であるが、周囲に4箇所の基準点(TP)を設置して多角測量を行い、各TPにおいて測定した磁北の平均をとった。この磁北をもとに任意座標を設定し、これを基準に4m間隔で北からA～F、西から1～7のグリッドを設定し、TP-3(50, 50)をF-1グリッド杭とした(杭の位置はグリッドの北西角)。なお、2年後の第6次調査の際に測量会社に委託して、GPS測量による3級基準点を付近に設置したが、今次調査の基準点は既に殆どが失われ、残っている基準点はTP-4のみであったため、公共座標による水平位置の補正是行っていない(標高については補正)。

### 第2節 多角測量成果

多角測量成果表

測角点	方向点	観測角	補正	方向角	距離	ΔX	補正	ΔY	補正	X	Y	座標点
TP-4	TP-1			260-57-45						65.501	47.731	TP-1
TP-1	TP-2	104-58-40	-10	185-56-15	6.010	-5.978		-0.622		59.523	47.109	TP-2
TP-2	TP-3	157-10-40	-10	163-6-45	9.952	-9.523		2.891		50.000	50.000	TP-3
TP-3	TP-4	46-2-10	-10	29-8-45	19.930	17.407	-1	9.707		67.406	59.707	TP-4
TP-4	TP-1	51-49-10	-10	260-57-45	12.127	-1.905		-11.976		65.501	47.731	TP-1

観測方向角	360-0-40
既知方向角	360-0-0
角の閉合差	0-0-40
配布点数	4

水平距離の和	48.019	閉合差
$\Sigma \Delta X$	34.813	0.001
$\Sigma \Delta Y$	25.196	0
配布点数	4	

実測年月日 980601  
天候 晴れ  
測量器名 CS-101F+棒コンパス6型  
測量者氏名 田上・森岡

GPS測量によるTP-4の座標値は次の通りである(第4系・括弧内は世界測地系への換算値)。

座標 X=63933.254(64312.714)m Y=3651.444(3409.648)m

緯度  $33^{\circ}34'35''$ ( $33^{\circ}34'47''$ )N  $133^{\circ}32'21''$ ( $133^{\circ}32'12''$ )E

### 第3節 方位測量成果(磁北)

方位測量成果表

測角点	方向点	観測方位角	補正	決定方位角
TP-4	TP-1	261-13-20	△ 0-15-35	260-57-45
TP-1	TP-2	184-51-40	1- 4-35	185-56-15
TP-2	TP-3	164-13-20	△ 1- 6-35	163- 6-45
TP-3	TP-4	28-51-10	0-17-35	29- 8-45

実測年月日 980601

天候 晴れ

測量器名 CS-101F +棒コンパス6型

測量者氏名 田上・森岡

上表のように通常のコンパスより精度の高いものを使用したもの、それでも各地点によるばらつきが大きく、観測値においては最大で $2^{\circ}$ 以上の誤差が生じている。しかし、4点の平均をとって分散したことで、決定値における誤差は $1^{\circ}$ 以内に収まっていると考えられる。

なお、国土地理院の計算式によって計算した磁北は西偏  $6^{\circ}44'$  である(世界標準時2000年1月1日0時現在)。

### 第4節 調査の手順

#### (1) 試掘調査

第1節で述べたように2箇所のトレーナーを設定したが、両方とも主に機械力を使って掘削を行い、遺構を検出したところで、人力に切り替えた。ただし、遺構が検出された時点で、現地において事業主との調整を行い、本調査実施についての理解が得られた。従って、試掘調査による遺跡の搅乱を極力少なくするために、遺構の掘削については確認のために一部を半裁するにとどめ、遺物についてもそれまでに露出した部分を取り上げるにとどめている。

#### (2) 本調査

試掘調査の結果から見て、両調査区とも盛土部分の下層は旧水田表土及び床土層であり、その直下に遺物包含層があり、包含層上面から遺構が検出されることが予想された。従って床土層までは機械による掘削を行ったが、遺構検出後は人力による遺構掘削及び、包含層掘り下げを行った。掘削の深さについては、建物の基礎で確実に破壊される部分に保護層を加えた深さまで調査を行っている。



図2 1区・2区完掘全図（縮尺1/100）

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

1区・2区ともにほぼ同じ土層の堆積状況だったので、まとめて述べる。

現在対象地に北接して東西に走っている農道・水路は近年付け替えたものであり、付け替える前には対象地の北側4分の1程度の部分を東西に走っており、その北側と南側とでは筆が違っていた。従って、土地利用にも相違があったと考えられる。調査区の1区西壁北寄り及び2区東壁の北寄りの堆積土層断面の対応する位置に、水路跡とみられる攪乱層が存在しており、その北側と南側では、上部の土層堆積状況に違いがみられる。ただ、土地利用の違いによる堆積状況の違いは遺物包含層の上までであると考えられ、調査において大きく掘り下げてはいないものの、遺構検出面以下においては大きな相違はみられなかった。北側と南側の土層は以下の通りである。

#### ・調査区北側

- |      |                         |
|------|-------------------------|
| 1層   | 盛土層                     |
| N 2層 | 黄灰色シルト、1~3cm大の小礫が少し混じる。 |
| N 3層 | 灰黄褐色砂質シルト               |
| N 4層 | 暗灰黄色砂質シルト、小礫が混じる。       |
| N 5層 | にぶい黄褐色シルト               |
| N 6層 | にぶい黄褐色砂質シルト             |
| 7層   | 暗褐色砂質シルト、円礫が混じる。        |

#### ・調査区南側

- |      |                        |
|------|------------------------|
| 1層   | 盛土層                    |
| S 2層 | 灰色シルト(やや粘質)            |
| S 3層 | にぶい黄褐色砂質シルト            |
| S 4層 | 暗褐色砂質シルト               |
| 7層   | 暗褐色砂質シルト、円礫が混じる。       |
| 8層   | 暗褐色砂質シルト、数cm大の円礫を多く含む。 |

上記の内、北側N 2層~N 4層及び南側S 2層が旧耕作土層、北側N 5層・N 6層及び南側S 3層が旧底土層と考えられ遺物はみられなかった。7層が遺物包含層であり、上面が遺構検出面になっている。円礫を比較的多く含む暗褐色土である。これは、これまでの調査で包含層とされた礫の多い黒褐色土や茶褐色土等とはほぼ同一の層であると考えられる。これより上層及び7層上

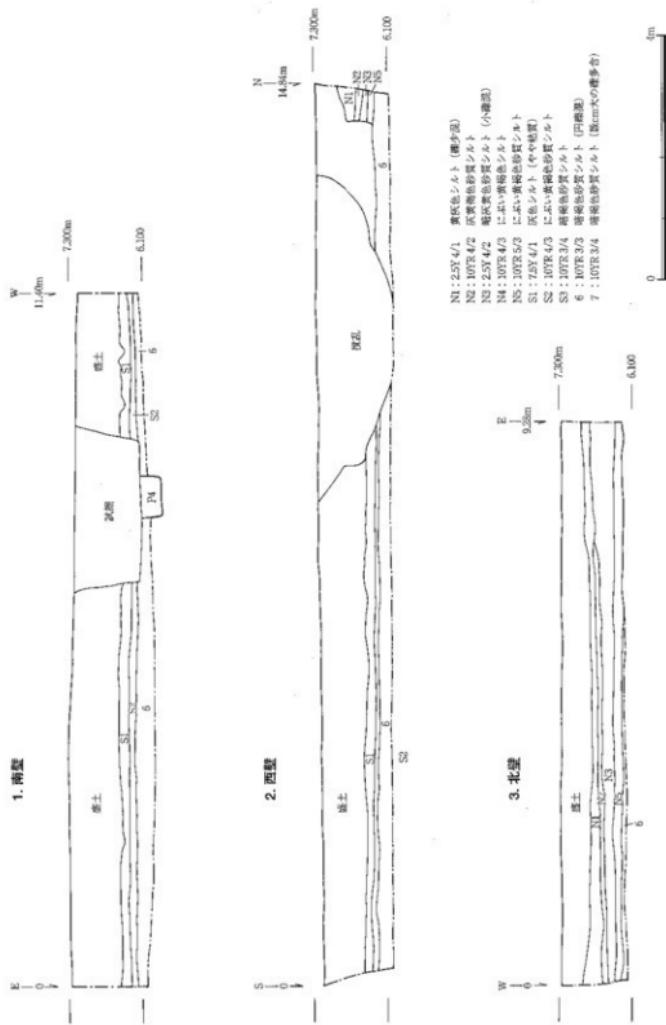


図3 1区土層断面図 (縮尺1/80)

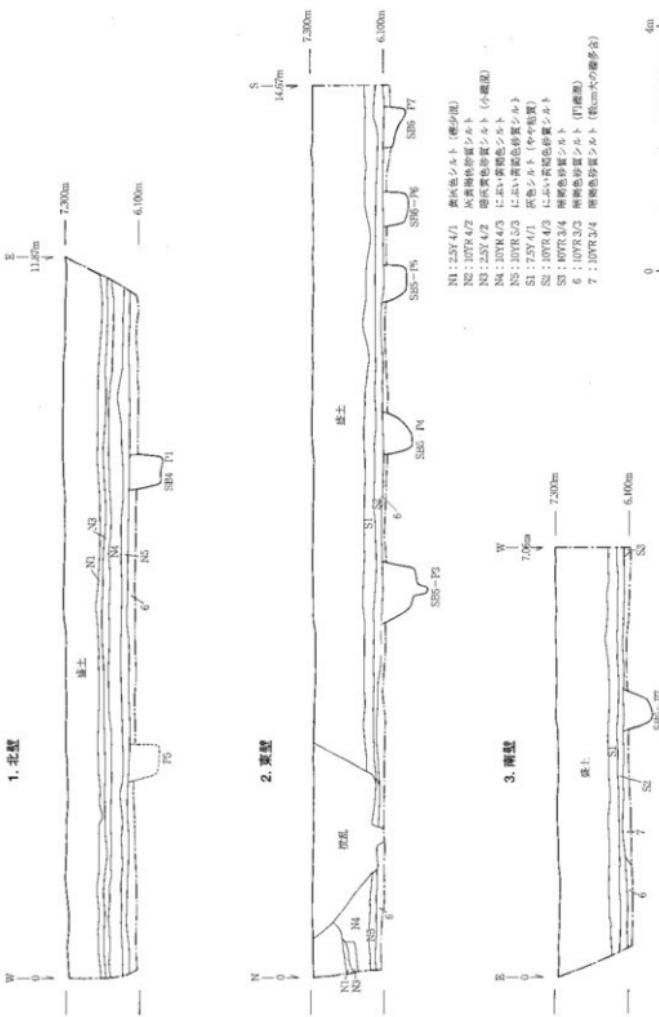


図4 2区土層断面図 (縮尺1/80)

部自体は後世の改変を受けている可能性が高いが、それ以下の層はは殆ど改変を受けていないものと考えられる。

また、調査2区の中央から南壁にかけて疊の割合が非常に多い層が存在しておりその部分については8層、それに付随する層をS4層とした。これは、旧河床部もしくは洪水疊層の起伏が現れた微高地の一部であろう。

## 第2節 検出遺構と出土遺物

### (1) 掘立柱建物跡

#### —SB1—

調査第1区の中央部から北側にかけて検出された梁間3間(5.04m)・桁行4間(7.84m)の南北棟建物である。柱間寸法の平均は梁間1.68m、桁行1.96mを測る。埋土はやや明るい暗褐色土である。建物の桁行方向の偏角は磁北を基準にN38°Eである。図化できた遺物は5点(1～3がP6、4がP9、5がP13からの出土)で、いずれも須恵器蓋坏である。坏蓋の1は天井部との境界で軽く屈曲するが、口縁の幅は狭くやや開き気味である。2～5は坏身で、2は表面が摩滅しており調整ははっきりしないが、他はナデ調整である。5は底部内面の同心円スタンプと思われる工具痕をナデ消し、外面にヘラ削り痕が残る。口縁部は全て立ち上がりが内傾しており、2がやや退化、3は貼付、4・5は折り込みによる。端部は2・3が丸く仕上げ、4・5は鋭角である。

#### —SB2—

調査第1区の中央部から北側にかけて検出された推定梁間2間(3.8m)・桁行5間以上の東西棟建物である。柱間寸法の平均は梁間1.9m、桁行1.92mを測る。建物北面桁行方向のピット列は検出できたものの、それ以外の検出ピットは2箇所のみであるため構列である可能性も否定できないが、2箇所のピットともに対応する北面のピット列と直交する位置にあり、ピット列からの間隔も一定であるため、ここでは掘立柱建物跡として扱う。埋土は暗褐色土である。建物の桁行方向の偏角は磁北を基準にN73°Eである。出土遺物は細片のみであり、図示できるものはなかった。

#### —SB3—

調査第1区の南西端において梁間1間・桁行1間のみを検出した南北棟建物である。柱間寸法は梁間2.0m、桁行2.16mを測る(寸法の短い方を梁間とした)。ただしピット3箇所のみの検出であるため、建物跡であるとの断定はできない。埋土はやや明るい暗褐色土である。検出した柱穴が少なく、また柱痕もなかったため、若干の誤差があると思われるが、建物の桁行方向の偏角は磁北を基準にN4°Eである。出土遺物は細片のみであり、図示できるものはなかった。

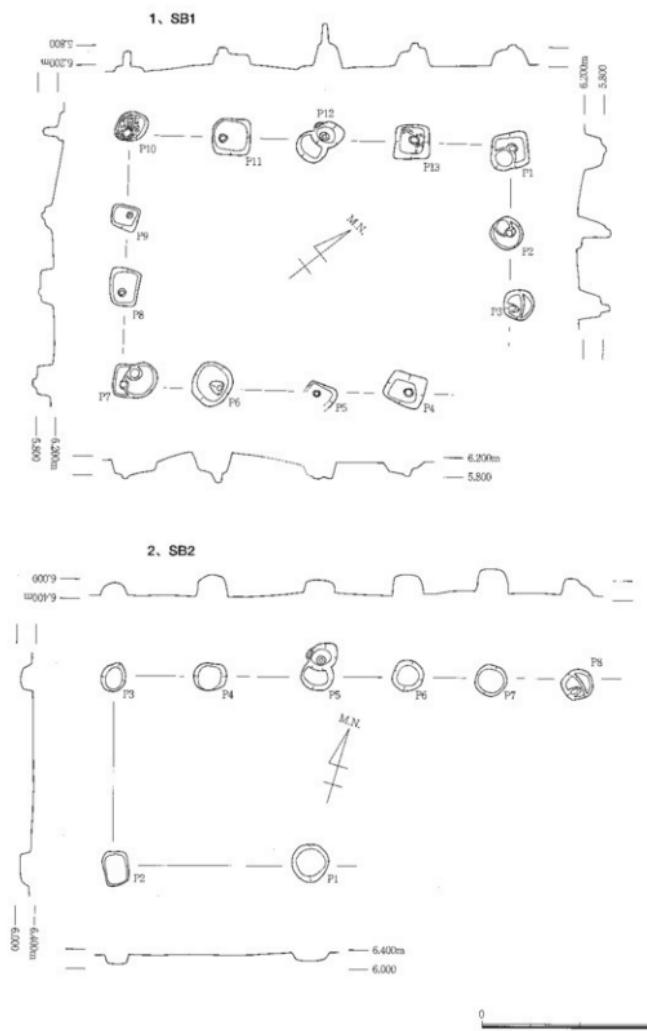
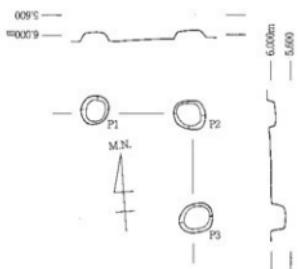


図5 SB1・SB2の平面図・断面図（縮尺1/100）

1. SB3



2. SB4

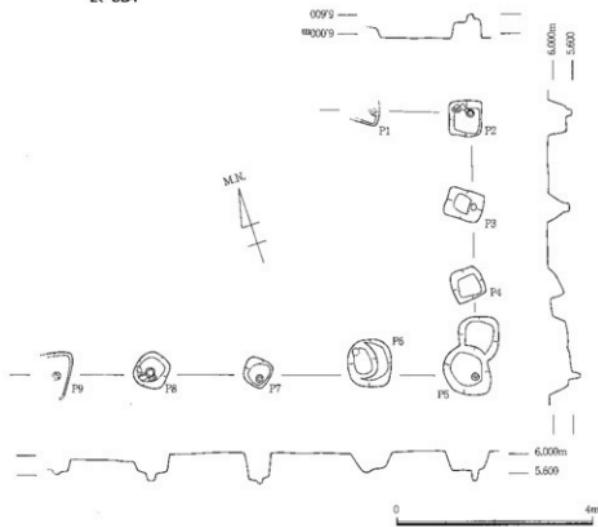


図6 SB3・SB4の平面図・断面図（縮尺1/100）

#### —SB 4—

調査第2区の北側やや西よりで検出された梁間3間(5.04m)・桁行4間以上の東西棟建物である。柱間寸法の平均は梁間1.68m、桁行2.04mを測る。埋土は黒褐色粘質土である。建物の桁行方向の偏角は磁北を基準にN73°Wである。図化できた遺物はP2から出土の坏蓋(6)のみである。細片であるため口径の復元は行っていない。蓋と身が逆転する前後の時期のもので、摩滅しているもののナデ調整と思われる。

#### —SB 5—

調査第2区の中央部から南側の東よりで検出された梁間2間(5.16m)・桁行4間(9.96m)の南北棟建物である。柱間寸法の平均は梁間2.58m、桁行2.48(南端のみやや狭く2.08)mを測り、梁間の柱間の方がやや長い。埋土は黒褐色粘質土である。建物の桁行方向の偏角は磁北を基準にN9°Eである。図化できた遺物は4点(7がP6、8・9がP7、10がP9からの出土)でいずれも須恵器である。7は蓋と身が逆転する前後の坏蓋でナデ調整、8は壺または瓶の口縁である。9は高坏または鉢と考えられ、口縁は若干外反し、端部は鋭く仕上げる。10は口縁部と天井部との境界がはっきりしないが天井部にヘラ削り痕が残る。

#### —SB 6—

調査第2区の南側やや東よりで検出された梁間3間(5.19m)・桁行3間以上の南北棟建物である。柱間寸法の平均は梁間1.73m、桁行1.84mを測る。埋土は黒褐色土である。建物の桁行方向の偏角は磁北を基準にN16°Wである。図化できた遺物は2点(11がP1、12がP10)でいずれも須恵器坏蓋である。11は口縁部と天井部の境界付近に凹線が残る。いずれもナデ調整であるが、12の天井部はヘラ削り痕が残り扁平である。

### (2) その他の遺構

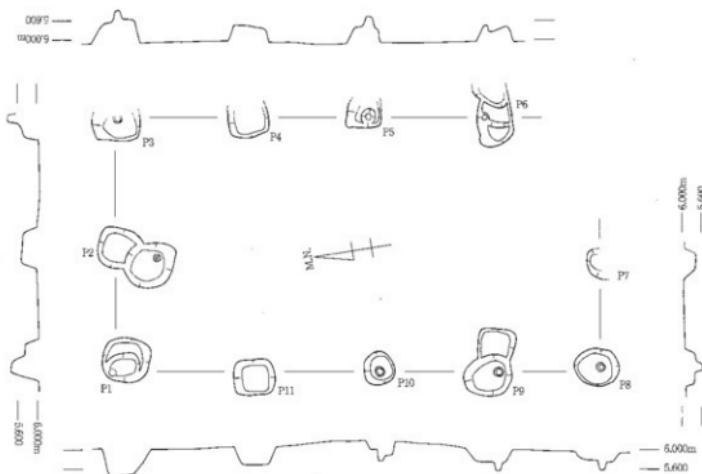
#### —P 1—

調査第1区の北西隅で検出した円形のピットで径約0.54×0.48m、検出面からの深さ約0.12mを測る。図化できた遺物は13の須恵器坏蓋のみである。口縁部と天井部の境界を凹線で表現しており、天井部外面はヘラ削りである。

#### —P 2—

調査第1区の中央付近において、まとまって検出した遺構群のひとつで方形に近く、径約0.42×0.38m、検出面からの深さ約0.15mを測る。図化できる遺物はなかった。

1、SB5



2、SB6

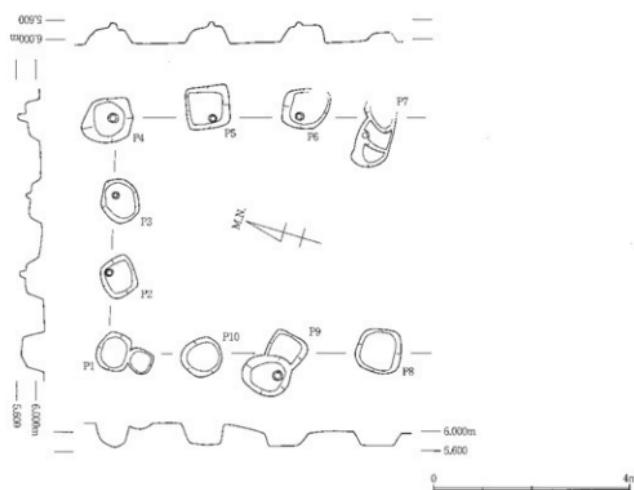


図7 SB5・SB6の平面図・断面図（縮尺1/100）

### — P 3 —

調査第1区の南よりで検出した円形のピットでSB1のP7と切り合っている。径約0.74×0.66m、検出面からの深さ約0.18m(柱根部分は約0.26m)を測る。図化できた2点(14・15)の甕は、いずれも弥生後期土器であろうと考えられる。14は口縁を面取り、頸部付近の外面に縦ハケ、内面に横ハケが残る。15は外面横方向に浅い窪みが凹線状に巡り、やや大型である。

### — P 4 —

調査第1区の南端で検出した方形のピットで、径約0.7m、検出面からの深さ約0.19mを測る。掘立柱建物の一部と考えられるが対応するピットが他になく、調査区外に拡がっている可能性が高い。図化できる遺物はなかった。

### — SK 1 —

調査第1区の中央付近においてまとめて検出した造構群の一つの土坑で、最大径約1.0m、検出面からの深さ約0.29mを測る。南半部は攪乱を受けているため北半部のみの検出である。図化できる遺物はなかった。

### — SK 2 —

調査第1区の中央付近において検出した不整形の土坑で、径約1.5×0.9m、検出面からの深さ約0.16mを測る。底面及び側面は5cm程度の厚さで赤変しており、土坑内部で火を使用したものと考えられる。図化できた遺物は2点(16・17)である。16は須恵器坏身でナデ調整。口縁部は折り込み、立ち上がりは内傾し、端部は丸く仕上げる。17の土師器甕は口縁が大きく開き、端部は丸く仕上げる。表面は摩滅が激しく、調整は不明である。

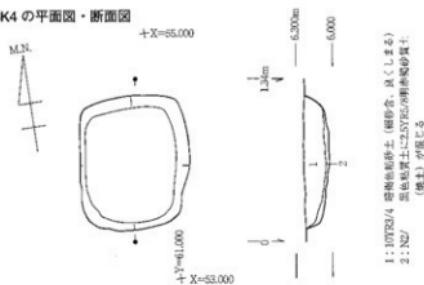
### — SK 3 —

調査第1区の中央付近において検出した楕円形の土坑で、径約1.0×0.5m、検出面からの深さ約0.13mを測る。図化できた遺物は18の須恵器坏蓋のみである。ナデ調整で、口縁部と天井部の境界で屈曲するが、口縁部の幅は狭くやや聞き気味である。天井部はヘラ切り未調整である。

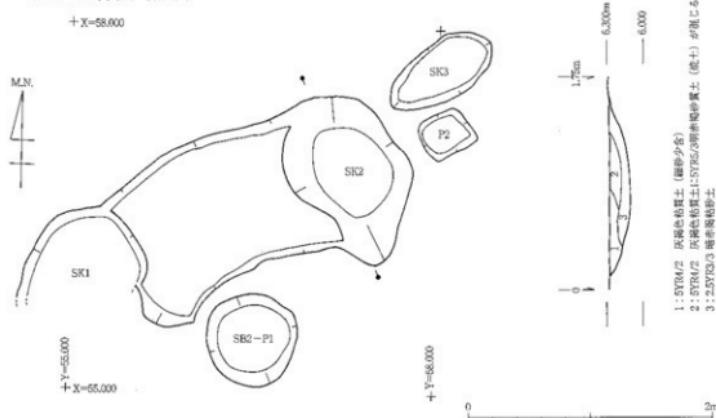
### — SK 4 —

調査第1区の南東部で検出した方形の土坑で、径約1.1×0.9m、検出面からの深さ約0.22mを測る。床面及び側面はSK2と同様に5cm程度の厚さで赤変しており、土坑内部で火を使用したものと推定される。図化できた遺物は須恵器坏2点(19・20)である。19の坏蓋は口縁部と天井部の境界で屈曲し、口縁部の幅は狭い。20の坏身は平底で逆台形に近いプロポーションを持ち、底部外縁はヘラ調整である。

1. SK4 の平面図・断面図



2. SK2 の平面図・断面図



3. SK3・P2 の遺物出土状況図

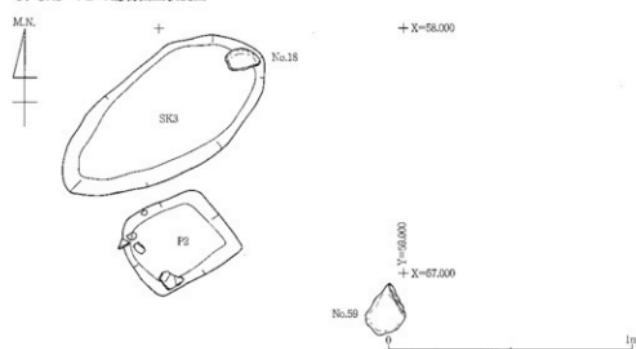


図8 SK4・SK2の造構図：SK3・P2の遺物出土状況図（縮尺1/40：1/20）

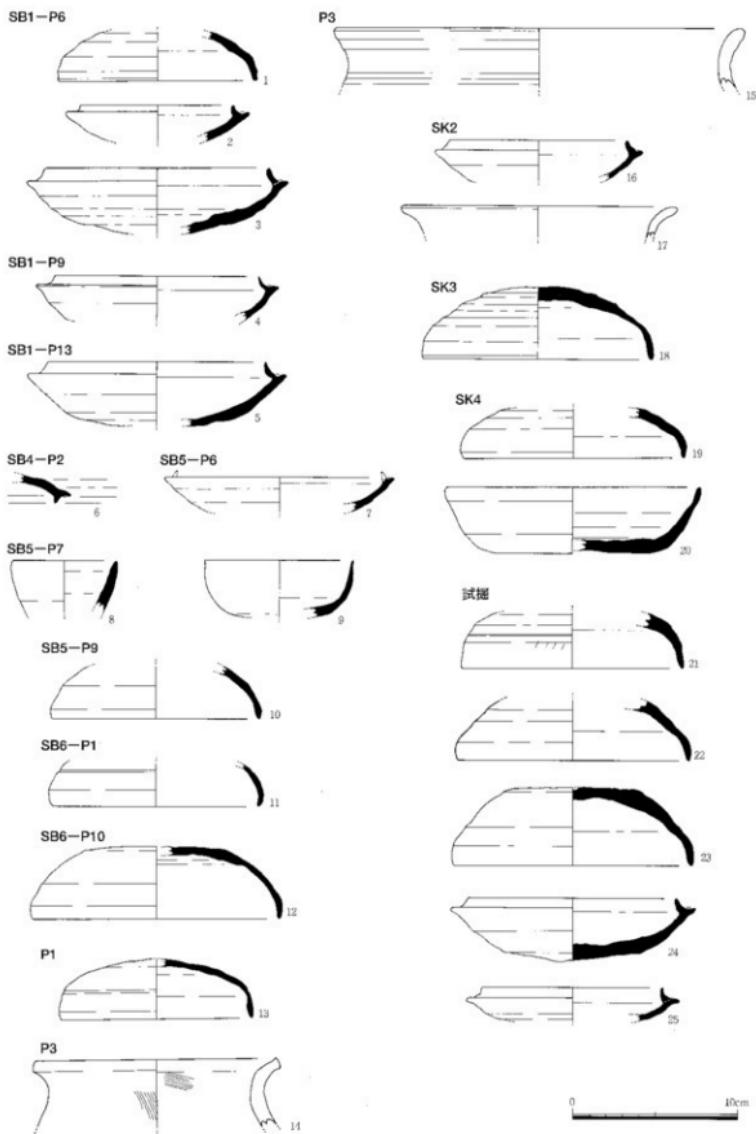


図9 造構出土遺物実測図(縮尺1/3)

### 第3節 包含層出土遺物

#### (1) 試掘調査出土遺物

図化できたのは5点で、全て須恵器蓋坏である(21~25)。坏蓋では口縁部と天井部の境界に凹線を有する21と、境界で屈曲しやや開き気味の22・23がある。坏身は24の口縁は折り込み、25は貼付である。なお、23と24は同一地点から上下に重なって出土しており、セット関係とみられる。天井部もしくは底部の残存している23・24の外面はヘラ切り未調整である。

#### (2) 本調査出土遺物

両調査区とも近接しており、面積も狭いので纏めて述べる。

- ・須恵器 図化できたのは32点である。

##### —蓋坏—

坏蓋(26~43)は復原口径の順に並べてあるが、口縁部と天井部の境界に凹線等後の痕跡のみられるタイプA(26・28・30・40)、屈曲のみでやや開き気味のタイプB(27・29・31~38)、上下逆転してかえりのついたタイプC(41・42)、他のタイプより扁平で開きが大きくツマミも扁平なタイプD(43)に区分できよう。なお、図示したタイプCの2点は何れも天井部が欠損しており、ツマミの形態が確認できるものはなかった。

タイプAのうちで28の天井部外面はヘラ削り、40は口縁が外反しており、天井部内面には同心円のスタンプが残る。ただし40はやや特異なプロボーションをしているが、坏蓋としてあつかった。タイプBのうち、32と35の口唇外面には、ヘラを使用して、細かい刻みによる装飾が付けられている。27の天井部外面はヘラ切り未調整である。なお39は天井部のみの出土であるが、外面にヘラ記号と思われる痕跡を有するため図示した。

坏身(44~54)は蓋ほどの時期差はみられないが、口縁部が比較的しっかりしているタイプA(47・50・51)と退化したタイプB(44~46・48・49・52~54)に区分できよう。坏身のA・B2タイプと坏蓋のそれとは、ほぼ一致すると考えるが、40は口縁部の形態からみて若干時期的に古い可能性がある。

蓋・身とともに形態で分類したが、口径のバラツキが大きいため、なお詳細な検討が必要である。

##### —その他の器種—

55は平底の胴部で、外面のほぼ全面に回転カキ目を施している。成形後天井部に充填した円盤の内面には指頭圧痕が残る。口縁部自体は欠損しているが、口縁貼付の際に生じた周縁のナデ痕跡がわずかに残る。

壺(56・57)のうち56は口縁部外面に粘土を貼付し段をつくっており、頸部から上はナデ、それ以下は内面に同心円タタキ、外面は縦方向の平行タタキの後回転カキ目を施す。57は段を形成する代わりに口縁部外面の凹線で表現しており、56の退化したものであろう。

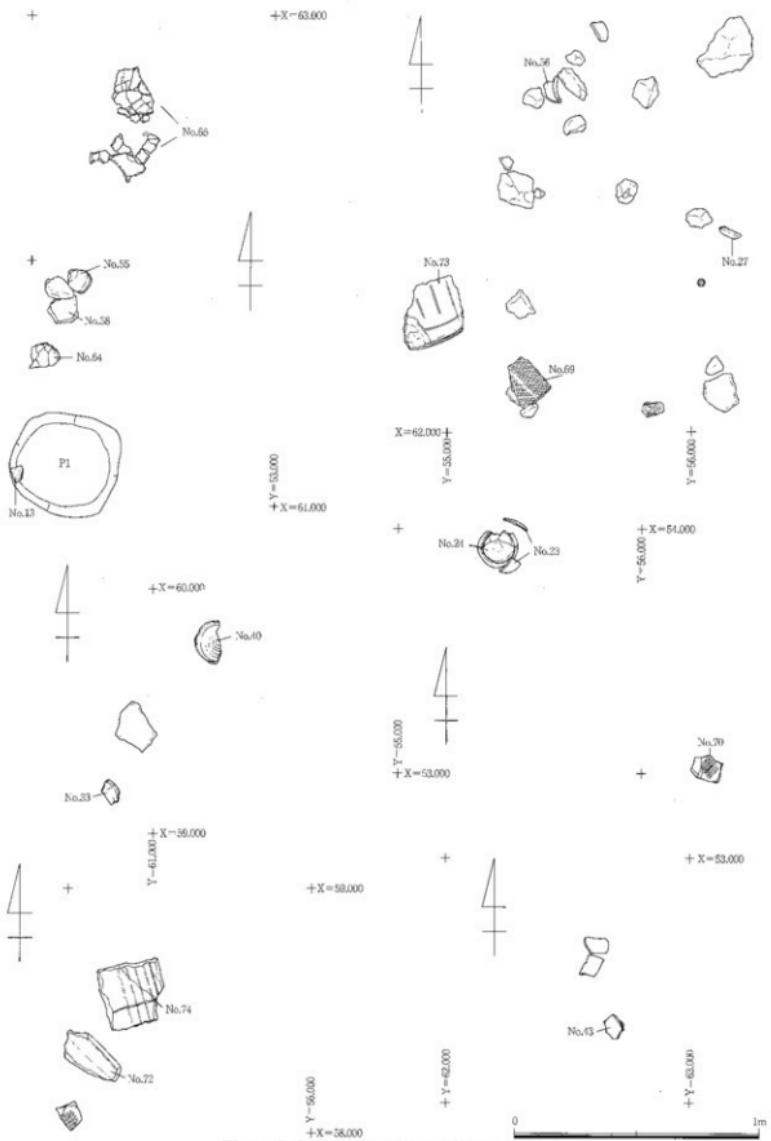


図10 包含層遺物出土状況図(縮尺1/20)

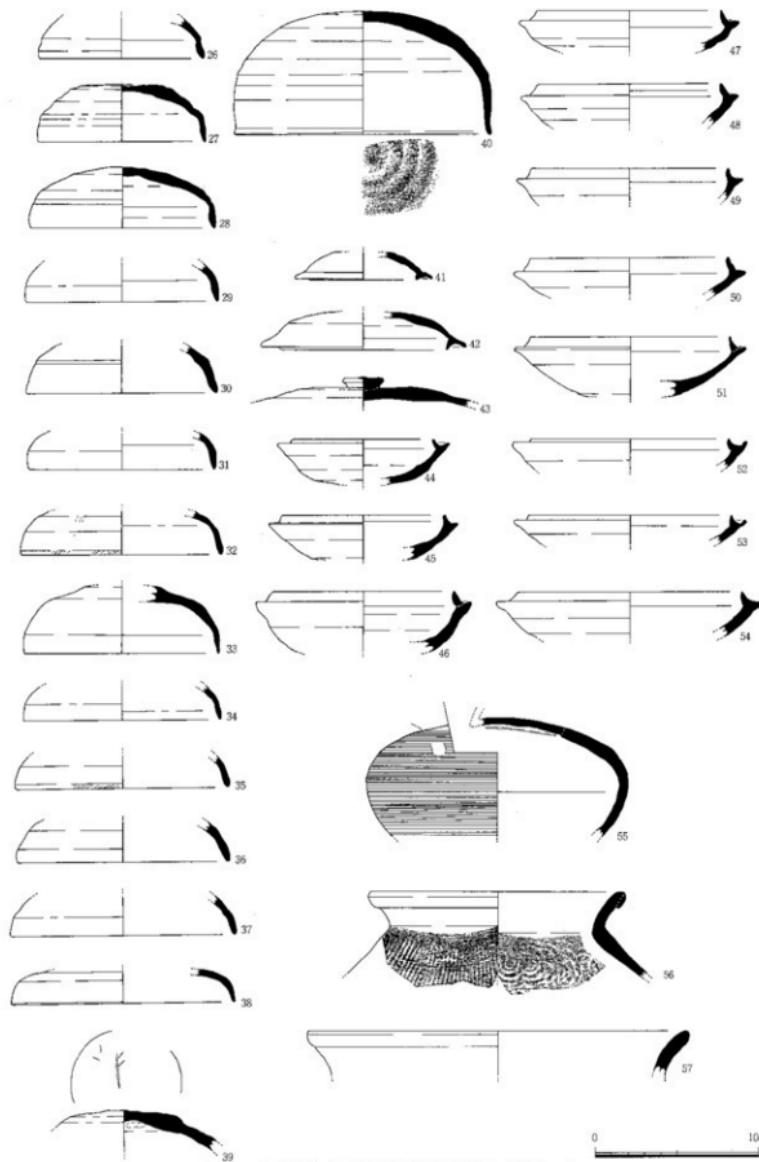


図11 包含層出土遺物実測図(須恵器、縮尺1/3)

#### ・凹石

図化できたのは2点(58・59)である。58は両面調整、片面に数条の擦痕がある。59は片面のみの調整で、裏面は自然面を残す。59については礎石の可能性があるが原位置を保っていなかった。両方とも石材は砂岩である。

#### ・土師器

図化できたのは7点(60~66)である。いずれも表面の摩滅が激しく調整ははっきりしないものが多い。60は回転糸切り底の小皿で、清掃中の出土であるため混入の可能性もある。61は小鉢で、調整は不明である。62は完全に土師質であるためここに分類したが、焼成不良の須恵器坏身または、壺の底部と考えられる。

63・64の壺は肩部から頸部にかけてと、頸部から口縁部にかけての2回屈曲して開き最大厚は頸部にある。65の壺は幅の狭い頸部で屈曲し、最大厚は口縁部にある。口縁は丸く纏める。何れも調整ははっきりしない。

#### ・弥生土器

細片であるが67・68は弥生後期土器であると思われる。表面の摩滅が激しいが、67の内面には横方向のハケの痕跡がみられる。

#### ・瓦類

図化できたのは女瓦3点、男瓦1点、字瓦2点の計6点である。

女瓦(69~71)のうち69は前後の厚みの違いからみて、字瓦の瓦当部が欠損したものである可能性が高い。桶巻き作りで凸面に斜格子タタキを施し、横方向に分割界線が存在する。タタキの格子目間隔等は字瓦とほぼ同じである。凹面には布目が残る。70は隅をカットした瓦で凸面に格子目タタキ(格子目間隔約1.5×1.2cm、タタキの単位幅7~8cm)を施す。他の秦泉寺廃寺での出土例から考えると、間隔をあけて同様のタタキを横に並べて施している可能性が高い。凹面には布目が残る。71は摩滅のため調整ははっきりしないが凸面にはナデ、凹面には布目の痕跡が残る。また、70・71の側面にはヘラ痕が観察できる。

行基葺男瓦の72は摩滅が激しいが凸面は縱及び横の2方向からナデ、凹面は布目の上から縱方向にナデを施す。

字瓦(73・74)は何れも桶巻き作りで、瓦当は粘土を重ねて肥厚させており、段頭は形成されていない。凸面には斜格子タタキ(格子目間隔約1.1×1.1cm、タタキの単位幅7~8cm)及び横方向のカキ目を施し、凹面には布目が残る。また、凹面には73の縱方向と横方向、74の横方向に分割界線が存在する。また、74では凹面に縱方向の糸切り痕が残る。

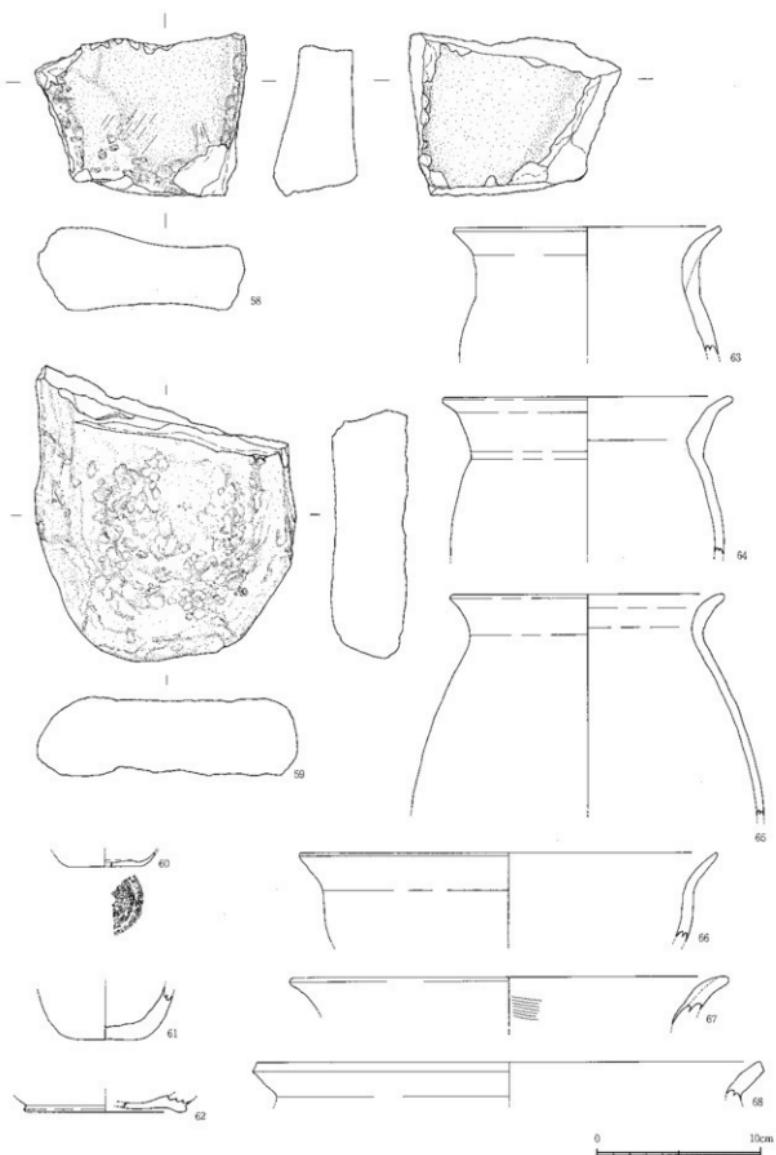


図12 包含層出土遺物実測図(凹石・土師器・弥生土器・縮尺1/3)

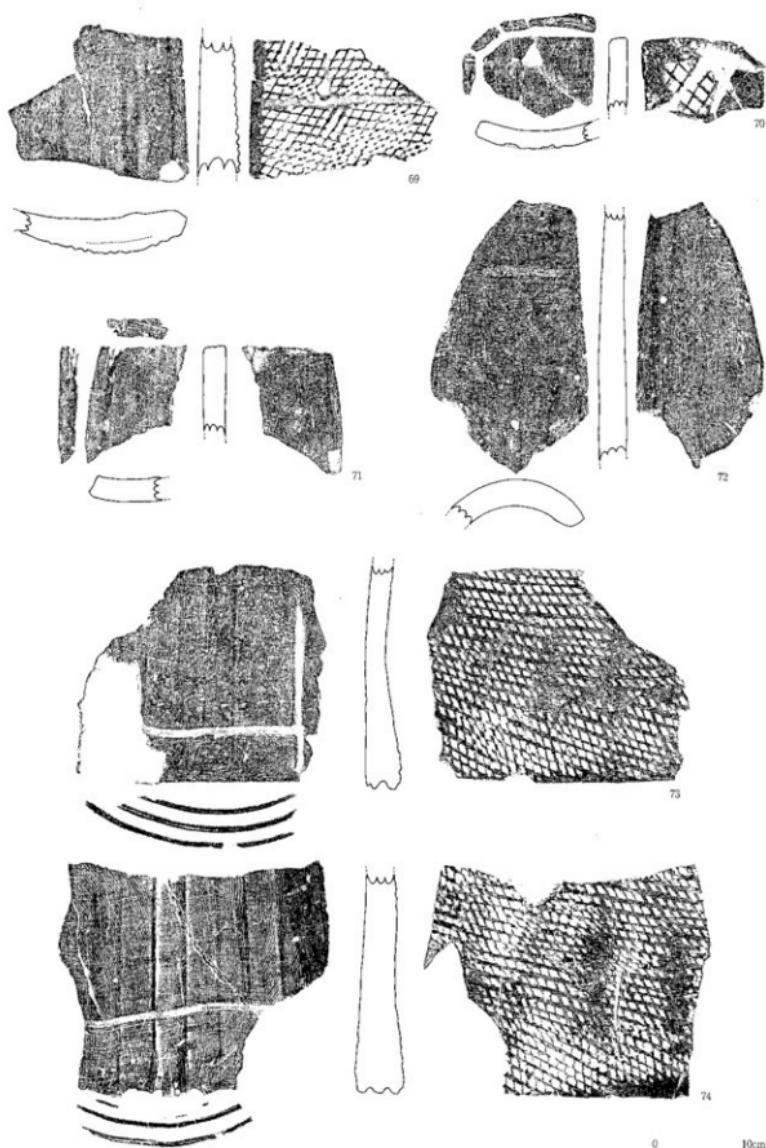


図13 出土瓦拓影及び断面図(縮尺1/5)

## 第4章　まとめ

今回の調査は第3次調査の南に接する土地が調査対象地であり、秦泉寺廃寺の発掘調査としては第5次調査となった。今回の調査では、対象地のほぼ全面から掘立柱建物跡・ピット・土坑などの遺構が検出され、土器・瓦などが出土した。ここでは、これまでの4次にわたる調査の成果も踏まえながらまとめとしたい。

### (1) 遺物

今回の調査で出土した遺物は土器類が遺物コンテナ2箱弱、ボリュームの大きい瓦・石を含めても4箱弱と少量であった。なお、図化した遺物74点のうち第1区出土分が59点(試掘分を含む)と大半を占め、第2区出土のものは少なかった。第3次調査においても対象地の西側からの出土が多かったことが指摘されており、特徴的な状況といえよう。この理由としては、西側が遺跡の中心部である(または中心部により近い)ということが考えられる。また、第2区では礫層が検出面として露出していることも一因であろう。

#### —瓦—

出土遺物の内、瓦類は図示しない細片を含めても、10点前後であり、非常に少ない。これは、今回検出した建物跡が全て掘立柱建物であり、瓦葺と推定できるものはなかったこととも関連がある。今回出土した瓦のうちで特徴的なものは、69・73・74にみられるような凸面全体に斜格子タタキを施したタイプである。このタイプの調整を施した瓦は、これまでの4次の調査では報告されておらず、秦泉寺廃寺では初出である。今回の出土例は3例とも字瓦もしくは字瓦とみられるものであり、曲線部部分に粘土を貼付した後のタタキであることから、字瓦固有のタタキであり、女瓦一般のものではない可能性もある。

何れも包含層からの単独出土であり、時期的なものを論じるのは難しいが、これまでの、出土字瓦の内では段頸+凸面凸帯(タタキ目ナデ消し)のタイプが創建期の鐘瓦とセットであることはほぼ確実で、それに比べると時代の下がった奈良時代以降のものであると考えられるが、それ以上のことは現段階では判断できない。

秦泉寺廃寺の女瓦(及び字瓦)凸面の器面調整については、その他に今回出土例では間隔をあけた格子目タタキ・無文があり、これまでの調査例も含めると縞杉文タタキ・筵目タタキ等が存在するが、現段階ではそれらの先後関係は判断しにくい。

#### —土器類—

今回出土の土器はその大半が須恵器蓋坏であった。さらに、「南四国の須恵器」[廣田 1994]の時期区分による二期に属するものがその内の大半を占め、三期の律令制期に属するものも若干(43・62)

含まれる。他の器種を含めても、それ以外の時期に入るものは弥生土器に分類した数点と、図化していないが明らかに古墳時代に分類できる土師器数点、及び中世以降の小皿が一点出土しているのみである。ここでは蓋坏のうち二期に属するとみられるもの(包含層出土遺物の項で述べたタイプA～C)について若干補足しておきたい。なお須恵器の型式区分は概ね上記(廣田 1994)に従った。

・タイプA(II-2～II-3型式)

坏蓋 先に述べたもの以外にP1出土の(13)、試掘出土の(21)が含まれる。

坏身 先に述べたもの以外にSB1出土の(3～5)が含まれる。

坏蓋は凹線の有無で分類したが、幅も狭く微かなものが多いため、II-3型式に近いものであろう。その中で、(40)はII-2の範疇に入ると考えられる。坏身も蓋と同様II-3に近いものであろう。

・タイプB(II-3～II-4型式)

先に述べたもの以外に遺構及び試掘出土の坏類の大部分が含まれる。坏蓋の(1・10～12・18・19・22・23)と坏身の(2・7・16・24・25)がそれである。II-4に近いものであろう。

・タイプC(III-1型式)

先に述べたもの以外にSB4出土の坏蓋(6)とSK4出土の坏身(20)が含まれる。

以上の分類と各型式との対応関係については、細片からの復元であるためか、先にも述べたように復元口径の面で難があるが、ここでは上記の通り分類しておく。

出土遺物の数で比較するとタイプBに属するものが最も多く、次いでタイプA、タイプCの順である。寺院創建期の蓋坏としてはタイプB以降のものが中心と考えられるため、ほぼその時期の遺物が大半を占めているのは間違いないと思われる。タイプAのものは寺院創建よりも若干先行すると考えられる遺物であるが、器の使用期間の問題や、量的に少ないという問題もあり、寺院創建以前の集落の存在についての結論にすぐ結びつけることはできないが、次の項で述べるように今回は寺院に先行する建物の存在を推定した。また、周辺の古墳や寺院の造営を担った集団の居住地が付近に存在していたことは、間違いないであろう。

## (2) 遺構

ここに掲載した図は、今回を含めて5次にわたる調査で確認された遺構を仮に集成したものである。ほぼ全ての遺構を纏めたため、各遺構の年代幅が大きいのはご容赦願いたい。また、各調査とも磁北をもとにした座標を用いているため、調査ごとに方位のバラツキが生じている。そのため、角度については、現在の土地区画をもとにして補正を行い、図中に示した方位は第5次調査(今回)のものを使用した。また水平の位置関係についても、同様に補正を行っている。このような図であるため、これをもとにした建物のグループ分けの作業にも限界がある。すなわち、明らかに別グループに属する

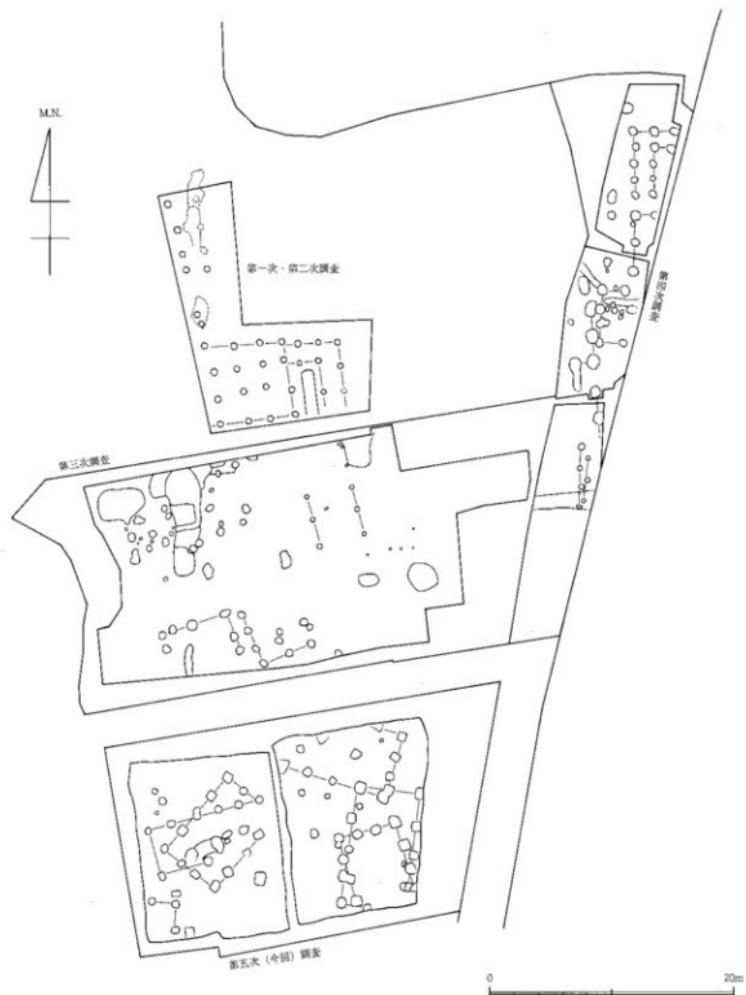


図14 1~5次調査検出遺構仮集成図(禁転載、縮尺1/400)

建物であるかどうかということを推論する作業の助けにはなりうるが、同じグループに属する建物であるかどうかを推論する作業の資料としては、正確さという点で限界がある。このような理由で、この集成図(図14)は現時点での試案であり、内容には一定の限界があるため、他への転載や使用等はご容赦願いたい。

#### 一掘立柱建物跡

各建物跡の先後関係であるが、柱穴の切り合いによって先後が推定できるのはSB1→SB2、SB5→SB6、SB5→SB4の三つである。これらの先後関係は第4次調査報告書[山本1994]で述べられた造構形成時期の順番と矛盾するものではないため、今次調査の切り合い関係で直接推定できない先後関係は、[山本 1994]の推定に従った。

##### 第1段階

上記のことを踏まえて今次調査の検出遺構をみてみると、まず目に付くのは掘立柱建物SB1の軸線方向の特異性である。これほど建物の軸線の偏角が大きい建物はこれまでの調査においても検出されていないため、[山本 1994]の推定でも触れられていない。時代判定の可能な出土遺物はタイプA及びタイプBの蓋壺であり、これだけで考えると寺院の創建期前後ないしは少し前の建物であると考えられる。今後の調査において、ほぼ同じ軸線をもつ建物からより新しい遺物が出土する可能性はあるが、ここでは今回の出土遺物をもとに考えたい。そして寺院建立後は周辺の建物の軸線への規制が働いたであろうことを考えて、寺院創建以前の建物であるという見解をとっておく。

##### 第2段階

SB1の次の段階にあたると考えられる建物は、SB5及びそれと軸線方向の近いSB3である。軸線方向は5°違うが、SB3は柱穴3個のみの検出であり、誤差を考えて同じグループとして扱う。SB5出土遺物のうち(9)の鉢はタイプCの併行期[III-1型式]であると考える。

##### 第3段階

その次の段階にあたると考えられるのが、SB4である。タイプCの蓋壺が出土している。

##### 第4段階

建物跡6棟のうち最後の段階にあたると考えられる建物はSB6及びそれと軸線方向がほぼ一致するSB2である。時代判定の可能な出土遺物はSB6のみから出土し、タイプA及びタイプBの蓋壺である。今回の結果のみで判断するならば第2段階と第3段階の中間に位置づけることができるが、ここでは[山本 1994]の見解に従っておく。なお、今後の検討が必要である。

上記の各段階の実年代については出土土器で考える限り、これまでの調査で古代寺院の存続期間

と考えられている平安時代前半までに取まつており、包含層出土土器を含めても、明らかに寺院衰退後と考えられる遺物は清掃中出土の(60)の小皿のみである。しかしながら、第1段階の項でも触れたように、寺院の伽藍が存続している時期には周辺部とはいえ、方向規制が働くであろうことを考えるならば、第2段階の存続期を平安時代前半まで(寺院の機能していたと考えられる期間)と位置づける方が自然であろう。このような前提に立つ以上、第3段階及び第4段階の建物跡の実年代は、出土土器の年代よりはかなり後の年代となるため、今回の結果のみで論じることには無理がある。なお、[山本 1994]の年代観に従えば第3段階は平安時代中頃～後半、第4段階は平安時代後半～末以降となるが、これまでに述べた通り今次調査の結果からだけでは、この年代観の妥当性について何らかの判断を下すことはできない。

なお、上記各遺構の中軸線方向は『土佐の条里』[大脇 1982]において述べられている、土佐郡の推定条里の方向(N16°W、真北から)との関連を窺わせるものではなく、寺院廃絶後においても条里制の影響は受けていないものと考えられる。第三段階の軸線が東隣の長岡郡のもの(N12°E)に近いが地形的・距離的に見て関連づけるには無理があろう。

#### —その他の遺構—

掘立柱建物の項で、遺構出土土器の年代よりかなり後の年代の建物を想定したため、それとの整合性を考えると、建物以外の土坑・ピット等についても存続時期の確定に制約が出てくる。従って、古代の土器が出土した遺構については、建物と同じく出土土器の年代よりも新しい年代を想定する必要が出てくる。

殆どの遺構が掘立柱建物の年代と重なるのはまず間違いないであろう。ただしP3のように弥生土器の出土した遺構もあり、またSK2では、古代の須恵器が出土している一方で古墳時代と思われる土師器甕の胸部片も一定量出土している。このようなことから考えるに、具体的にどれとは確定できないものの、寺院建立以前に遡る弥生時代～古墳時代にかけての遺構もいくつかはありそうである。

### (3)補足事項

#### —泰泉寺廃寺の寺域について—

[山本 1994]では今次対象地の範囲は寺域外であろうと推定されている。今回の調査結果においては、その点についての確証は得られなかった。ただ、掘立柱建物跡しか検出されず、基壇の痕跡もなかったことや、瓦類の出土が少なかったこと等からみて、少なくとも中心部分でないことは確かであると思われる。これまでの調査で指摘されていた通り、古代寺院の中心部分は今次調査の対象地より北方の第1次・第2次調査の対象地付近であることは間違いないであろう。なお、現在整理作業中ではあるが、2000年に第2次調査対象地の北側で行われた第6次調査(今次調査対象地の北方約60～100mの箇所)においては、基壇や礎石は検出されなかったものの多量の古代瓦が出土しており、瓦葺きの建物が存在していたことが推定できる。このことから考えても、古代寺院の中心寺域は今次対象地の北方であることはほぼ確実である。

・参考文献(著者名については執筆者が明記されているものについては、中心的な執筆者を先頭にし、編者等は執筆者の後に記述した。また、執筆者・編集者が多人数の場合は代表者の氏名にとどめた。)

- 川村源七他『長宗我部地検帳 土佐郡 上』(高知県立図書館、1957)
- 高知市史編纂委員会『高知市史－上巻』(高知市、1958)
- 高知市史編纂委員会『高知市史－中巻』(高知市、1971)
- 『高知県百科事典』(高知新聞社、1976)
- 廣田典夫・岡本健児『秦泉寺廃寺－第1次・第2次調査』(高知市教育委員会、1977)
- 中村浩他『陶邑Ⅲ』(大阪府教育委員会、1978)
- 小笠原好彦他『来住廃寺』松山市文化財調査報告書第12集(松山市教育委員会、1979)
- 湊哲夫他『美作国分寺発掘調査報告』(津山市教育委員会、1980)
- 大脇保彦『土佐の条里－その復原再考と補説』高知の研究第2巻・古代中世編(清文堂出版、1982)
- 山本哲也・詫問一之『秦泉寺廃寺跡－第3次調査』高知市文化財調査報告書第5集(高知市教育委員会、1984)
- 森郁夫『瓦』考古学ライブラリー43(ニュー・サイエンス社、1986)
- 松本紀郎『秦泉寺古墳群補遺』秦史談第17号(秦史談会、1986)
- 廣田佳久『土佐国衙跡発掘調査報告書第10集－金谷・神ノ木地区の調査－』高知県埋蔵文化財調査報告書第28集(高知県教育委員会、1990)
- 古代の土器研究会『古代の土器1 都城の土器集成』(1992)
- 古代の土器研究会『古代の土器研究－律令的土器研究の西東・2須恵器－』(1993)
- 中村浩『須恵器』考古学ライブラリー5(ニュー・サイエンス社、1993)
- 廣田佳久『南四国の須恵器－周辺地域における須恵器の変遷』王朝の考古学(雄山閣出版、1994)
- 山本哲也・吉成承三『秦泉寺廃寺発掘調査報告書－県道高知本山線道路改良工事に伴う発掘調査報告書』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第18集(高知県文化財団埋蔵文化財センター、1994)
- 中村浩『須恵器集成図録第1巻 近畿編1』(雄山閣、1995)
- 宮内真一・水本完児『来住廃寺－第19次調査』松山市文化財調査報告書第56集(松山市教育委員会、1996)
- 池澤俊幸『南四国における古代前期の土器様相、下ノ坪遺跡の成果を中心として』下ノ坪遺跡Ⅱ、野市町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集(野市町教育委員会、1998)
- 上原真人『瓦を読む』歴史発掘第11巻(講談社、1997)
- 蓮本和博『軒平瓦に見る謹岐の白鳳寺院』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要7(財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、1999)
- 池澤俊幸『土佐から見た平安時代の土器』中近世土器の基礎研究XV(日本中世土器研究会、2000)

出土遺物観察表 満志呂・土師器・陶生土器

番号	出土場所	標線	法面 (cm)	地質・施文	測量 (外観) (内面)	色調 (外観) (内面)	地質 (内面) (外側)	地土構成	保存率	備考
1	SBI-76	年輪	11.0	(3.0)	口縁部と天井部の施文付近で底面・口 縁部に、土師器特有の施文がある。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 SPB6/1 青灰	青灰 青灰	1/8	
2	SBI-76	年輪	0.3	(2.2)	立ち上り土は施文無し、底面は丸く 仕上げる。受け脚は土器外方にいる。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 SPB6/1 青灰	青灰 青灰	1/8	
3	SBI-76	年輪	13.6	(4.0)	立ち上り土は施文無し、底面は丸く 仕上げる。受け脚は土器外方にいる。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 SPB6/1 青灰	青灰 青灰	1/6	
4	SBI-76	年輪	12.4	(2.7)	安土上がり土は施文無し、底面は丸く 仕上げる。受け脚は土器外方にいる。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 SPB6/1 青灰	青灰 青灰	1/8	
5	SBI-73	年輪	13.2	(3.0)	立ち上り土は施文無し、底面は丸く 仕上げる。受け脚は土器外方にいる。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 SPB6/1 青灰	青灰 青灰	1/4	底、側一面砂を少含む。
6	SBI-72	年輪	1.8		立溝底にはぼんやり圓く、内面に比較 的弱い施文がある。	円柱ナメ 円柱ナメ	2.5YR 8/2 黄白 7.5YR 8/2 黄白	粗、0.5mm以下の長石・礫 多く含む。	1/4	
7	SBI-76	年輪	14.1	(2.1)	受け脚は土器外方にいる。	円柱ナメ 円柱ナメ	SYR 5/4 G4/4 ぶじ風 SPB6/1 青灰	やや青 青灰	繊片	
8	SBI-72	口縁	6.6	(3.2)	背傾し、端部は丸く仕上げる。腹部外 面に比較的弱い施文がある。	円柱ナメ 円柱ナメ	300/6/1 錆灰 300/6/1 錆灰	やや粗、0.5mm以下の長石 多く含む。	繊片	
9	SBI-72	林坪	0.2	(3.5)	丸みを帯びた立溝底となり、内面に比較 的弱い施文がある。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 SPB6/1 青灰	やや粗、0.5mm以下の長石 多く含む。	1/3	
10	SBI-76	年輪	12.8	(3.2)	口縁部と天井部の施文はほとんどない。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 SPB6/1 青灰	やや粗、0.5mm以下の長石 多く含む。	1/4	
11	SBI-76	年輪	12.6	(2.6)	口縁部と天井部との施文付近に施文は あるが、それ以外は施文はほとんどな い。	円柱ナメ 円柱ナメ	100/6/1 錆灰 SPB6/1 青灰	粗、0.5mm以下の長石を少 量含む。	1/8	
12	SBI-70	年輪	15.2	(4.0)	1.横溝底と笄痕部との施文がほとんどな い。 2.口縁部と笄痕部との施文がほとんどな い。	円柱ナメ 円柱ナメ	2.5YR 7/2 黄 SPB6/1 青灰	やや粗、微細形状含む。 やや不均	1/3	
13	P1	年輪	11.6	(3.7)	口縁部と天井部の施文を凹面で表現。 1.横溝底は付いていない。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 7.5YR 7/1 青灰	粗、1mm以下の長石・礫 多く含む。	1/4	
14	P3	億	14.8	(4.2)	口縁は丸く外反し、口部は直角引 き、腹内面は圓く、脚部外面も丸くハ ラウタリ。	楕ナメ 楕ナメ	2.5YR 7/6 鮎 2.5YR 7/4 G4/4 ぶじ風	粗、側一面砂を少含む。	1/12	
15	P3	億	24.8	(3.6)	口縁は反し、通溝底は丸く引け、 腹成形が弱いが、腰部外面は丸くハ ラウタリ。	楕ナメ 楕ナメ	2.5YR 5/2 鮎 SYN6/1 青灰	粗、側一面砂を多く含む。	1/20	
16	SK2	年輪	10.6	(2.0)	口縁部と天井部との施文付近に 凹面で表現する。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 錆灰 SPB6/1 錆灰	やや粗、微細を多く含む。	繊片	
17	SK2	年輪	10.5	(1.9)	口縁部と天井部との施文付近に 凹面で表現する。	円柱ナメ 円柱ナメ	SYR 5/2 鮎 SYR 5/2 鮎	粗、側一面砂を多く含む。	繊片	
18	SK3	年輪	13.8	4.4	立溝底と天井部の施文付近でやや削 平。口縁は丸く外反。	円柱ナメ 円柱ナメ	100/6/1 錆灰 SPB6/1 青灰	粗、側一面砂を少含む。	1/2	良好
19	SK4	年輪	13.4	(3.1)	1.横溝底と笄痕部との施文付近でやや削 平。口縁は丸く外反。	円柱ナメ 円柱ナメ	50/6/1 錆灰 SPB6/1 青灰	粗、0.5mm以下の長石を少 量含む。	1/2	
20	SK4	年輪	15.4	4.1	0.5 (3.0) 滲溝底に近づいてボーリング箇所で、西台 付近で付いている。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 2.5YR 7/1 青灰	やや粗、0.5mm以下の長石を少 量含む。	1/2	
21	武南TR2	年輪	13.6	(3.4)	口縁部と天井部の施文付近に凹面一 筋。1.横溝底と笄痕部との施文付近で 凹面で表現する。	円柱ナメ 円柱ナメ	SYR 1/6 鮎 SPB6/1 青灰	やや粗、微細を多く含む。	1/12	
22	武南TR1	年輪	14.1	(3.7)	口縁部と天井部との施文付近で若干削 平。口縁は丸く外反。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 UNIG6/1 錆灰	粗、側一面砂を多く含む。	1/5	
23	武南TR1	年輪	14.5	4.3	天井部と天井部との施文付近で若干削 平。口縁は丸く外反。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 200GS/1 錆灰	やや粗、微細を少含む。	1/8	24セット
24	武南TR1	年輪	12.6	3.9	立ち上り土は立溝底、上方に口周部。 脚部も丸く仕上げる。受け脚は土器外 面に付いていない。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 錆灰 SPB6/1 青灰	やや粗、0.5mm以下の長石のほ ぼ丸形	23セット	
25	7層	年輪	11.0	(2.1)	立ち上り土は立溝底で、内面は直角引 き、脚部も丸く仕上げる。受け脚は土器外 面に付いていない。	円柱ナメ 円柱ナメ	SYR 6/1 モリーフ SPB6/1 錆灰	やや粗、0.5mm以下の長石 多く含む。	1/16	
26	7層	年輪	10.6	(2.6)	口縁部と天井部との施文付近に凹面一 筋で表現する。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 錆灰 SPB6/1 錆灰	やや粗、側一面砂を含む。	繊片	
27	7層	年輪	10.2	3.5	口縁部と天井部との施文付近で凹面一 筋で表現する。	円柱ナメ 円柱ナメ	SYT 7/1 鮎 SPB6/1 青灰	やや粗、側一面砂を含む。	1/2	
28	7層	年輪	11.2	3.7	口縁部と天井部との施文付近に凹面一 筋で表現する。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 錆灰 SPB6/1 青灰	やや粗、0.5mm以下の長石を少 量含む。	1/2	
29	7層	年輪	11.7	(2.4)	口縁部と天井部との施文付近で若干削 平。口縁は丸く外反。	円柱ナメ 円柱ナメ	2.5YR 7/1 鮎 SPB6/1 青灰	やや粗、0.5mm以下の長石のほ ぼ丸形	1/12	
30	7層	年輪	11.6	(2.6)	口縁部と天井部との施文付近に凹面一 筋で表現する。口縁は丸く外反。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 錆灰 SPB6/1 青灰	やや粗、微細を含む。	繊片	
31	7層	年輪	12.2	(2.4)	口縁部と天井部との施文付近で若干削 平。口縁は丸く外反。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 SPB6/1 青灰	やや粗、側一面砂を含む。	繊片	
32	7層	年輪	12.5	(2.7)	口縁部と天井部との施文付近で若干削 平。口縁は丸く外反。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 錆灰 SPB6/1 青灰	やや粗、1mm以下の長石を少 量含む。	1/8	
33	7層	年輪	11.6	(4.4)	口縁部と天井部との施文付近で少し削 平。口縁は丸く外反。	円柱ナメ 円柱ナメ	2.5YR 7/1 鮎 10YR 7/1 鮎	側一面砂を少含む。	1/3	
34	7層	年輪	12.0	(2.6)	口縁部と天井部との施文付近で若干削 平する。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 SPB6/1 青灰	やや粗、0.5mm以下の長石 多く含む。	1/12	
35	7層	年輪	13.0	(2.6)	口縁部と天井部との施文付近で若干削 平。口縁は丸く外反。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 SPB6/1 青灰	やや粗、0.5mm以下の長石 多く含む。	1/12	
36	7層	年輪	12.9	(2.5)	口縁部と天井部との施文付近で若干削 平。口縁は丸く外反。	円柱ナメ 円柱ナメ	10YR 7/1 鮎 SPB6/1 青灰	やや粗、側一面砂を含む。	1/12	
37	7層	年輪	13.7	(2.4)	口縁部と天井部との施文付近で若干削 平。口縁は丸く外反。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 SPB6/1 青灰	やや粗、側一面砂を含む。	1/12	
38	7層	年輪	14.6	2.2	口縁部と天井部との施文付近で若干削 平。口縁は丸く外反。	円柱ナメ 円柱ナメ	SPB6/1 青灰 SPB6/1 青灰	やや粗、側一面砂を含む。	1/3	
39	7層	年輪	12.6		大井部外縁には黒化斑。	円柱ナメ 円柱ナメ	100GS/1 鮎 SPB6/1 青灰	側一面砂を含む。	2/3	

出土遺物観察表 漢字器・土師器・弥生土器

番号	出土箇所	種類	法寸 (cm)	形態	特徴	調査 (内訳)	色調	外側 (内側)	加工	既存	既存
40	7層	耳壺	15.8	7.5	口径と底の直径が等しい。口縁部と天端部の内側に凹部がある。口部は開き気味で、底部を少しつぶしている。	圓軸ナメ・同心円サンプ ル・内側ナメ	7.5cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、面部を極少含む。 小孔	1/2	
41	7層	耳壺	17.0	11.0	口縁部内側に直線状のくびれを持つ。口縁部は開き気味で、底部を少しつぶしている。	圓軸ナメ 内側ナメ	8.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	やや粗、0.5mm以下の微孔 を多含む。	1/4	
42	7層	耳壺	(10.1)	9.0	口縁部内側に直線状のくびれを持つ。口縁部は開き気味で、底部を少しつぶしている。	圓軸ナメ 内側ナメ	8.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、0.5mm以下の微孔、網 目を含む。	1/16	
43	7層	耳壺	—	—	扁平な火炎形に、腹平なつまみ足付。	圓軸ナメ 内側ナメ	9.0cm/1.5cm 10.0cm/1.5cm	黒(内側)	やや粗、0.5mm以下の微孔 を多く含む。	1/2	
44	7層	耳壺	19.0	10.0	底から上部約1/3ほどに、腹部をよく せよげる。受け部は上外方に傾いている。	圓軸ナメ・ハラカリモチ 内側ナメ・指屈足・底屈足	9.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	やや粗、微妙を少含む。	調査	
45	7層	耳壺	10.0	5.0	底から上部約1/3ほどに、腹部をよく せよげる。受け部は上外方に傾いている。	圓軸ナメ 内側ナメ	5.0cm/1.5cm 10.0cm/1.5cm	黒(内側)	やや粗、微妙を多く含む。	1/4	
46	7層	耳壺	11.0	5.0	底から内側約1/3ほどに、外側に浅い くびれがある。受け部は上外方に傾いている。	圓軸ナメ 内側ナメ	5.0cm/1.5cm 10.0cm/1.5cm	黒(内側)	變、脚跡を少含む。	1/4	
47	7層	耳壺	12.0	6.0	底から内側約1/3ほどに、外側に浅い くびれがある。受け部は上外方に傾いて いる。受け部の蓋面は丸く、内側に凹む。	圓軸ナメ 内側ナメ	5.0cm/1.5cm 10.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	やや粗、0.5mm以下の長石 を少含む。	1/6	
48	2層	耳壺	11.0	6.0	底から内側約1/3ほどに、腹部をよく せよげる。受け部は上外方に傾いて いる。受け部の蓋面は丸く、内側に凹む。	圓軸ナメ 内側ナメ	5.0cm/1.5cm 10.0cm/1.5cm	黒(内側)	やや粗、0.5mm以下の長石 を少含む。	1/16	
49	7層	耳壺	12.0	6.0	底から内側約1/3ほどに、腹部をよく せよげる。受け部は上外方に傾いて いる。受け部の蓋面は丸く、内側に凹む。	圓軸ナメ 内側ナメ	5.0cm/1.5cm 10.0cm/1.5cm	黒(内側)	やや粗、0.5mm以下の長石 を少含む。	調査	
50	7層	耳壺	12.0	6.0	底から内側約1/3ほどに、外側に浅い くびれがある。受け部は上外方に傾いて いる。受け部の蓋面は丸く、内側に凹む。	圓軸ナメ 内側ナメ	5.0cm/1.5cm 10.0cm/1.5cm	黒(内側)	變、脚跡を少含む。	1/8	
51	7層	4分身	12.0	3.0	うち2分身は内側縦や横縦、3分身は 内側縦(1)である。	圓軸ナメ・ヘラリヨリモチ 内側ナメ	9.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	やや粗、粗さを少含む。	1/16	
52	7層	4分身	12.0	3.0	うち2分身は内側縦や横縦、3分身は 内側縦(1)である。	圓軸ナメ 内側ナメ	9.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	やや粗、0.5mm以下の長石を 多く含む。	1/8	
53	7層	4分身	12.0	3.0	うち2分身は内側縦や横縦、3分身は 内側縦(1)である。	圓軸ナメ 内側ナメ	9.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、粗さを含む。	1/16	
54	7層	4分身	12.0	3.0	うち2分身は内側縦や横縦、3分身は 内側縦(1)である。	圓軸ナメ 内側ナメ	9.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、脚跡を少含む。	1/8	
55	7層	平瓶	—	—	底は大輪の丸の2段構成である。 内側縦(1)と内側縦(2)である。	圓軸ナメ 内側ナメ	9.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	やや粗、1.0mm以下の長石 を少含む。	1/8	
56	2層	泡	15.0	5.0	口縁部はやや外反し、側面に凹部がある。 口縁部(1)と(2)である。側面に凹部がある。 側面に凹部がある。	圓軸ナメ 内側ナメ	5.0cm/1.5cm 10.0cm/1.5cm	黒(内側)	變、脚跡を少含む。	1/6	
57	7層	泡	23.0	8.0	口縁部はやや外反し、側面に凹部がある。 側面に凹部がある。	圓軸ナメ 内側ナメ	10.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、脚跡を少含む。	1/25	
58	7層	小瓶	10.0	4.0	底から内側にしわらじょう上がる。	變、内側不規則	7.5cm/8.0cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、内側不規則	1/4	
59	7層	小瓶	—	—	底から内側にしわらじょう上がる。	變、内側不規則	7.5cm/8.0cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、1.0mm以下の長石・中 長石を多く含む。	1/4	
60	7層	小瓶	—	—	底から内側にしわらじょう上がる。	變、内側不規則	7.5cm/8.0cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、1.0mm以下の長石・中 長石を多く含む。	1/4	
61	7層	杯	—	—	底から内側にしわらじょう上がる。	變、内側不規則	5.0cm/5.0cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、内側不規則	1/4	
62	7層	杯	—	—	底から内側にしわらじょう上がる。	變、内側不規則	5.0cm/5.0cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、内側不規則	1/4	
63	7層	泡	16.0	5.0	手取部はほんと細くて、側面のくら みが少ない。口は外反して開き、 くらみが大きい。	變、内側不規則	10.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、内側不規則	1/3	
64	7層	泡	17.0	6.0	手取部はほんと細くて、側面のくら みが少ない。口は外反して開き、 くらみが大きい。	變、内側不規則	10.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、内側不規則	1/36	
65	7層	瓶	16.4	13.0	側面の内側に、側面に凹部がある。 側面に凹部がある。	變、内側不規則	10.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	やや粗、中へ凹部を多く 含む。	1/2	
66	7層	瓶	—	—	側面と口縁部の腰部で削り出し、 側面に凹部がある。	變、内側不規則	10.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、中へ凹部を多く含む。	1/10	
67	7層	瓶	26.0	6.0	口縁部は大きく開いていて、側面に凹部 がある。内側にハゲた跡がある。	變、内側不規則	10.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、中へ凹部を多く含む。	調査	
68	7層	瓶	30.0	7.0	口縁部は腰部で削り出して開いて、 側面に凹部がある。	變、内側不規則	10.0cm/1.5cm 2.5cm/1.5cm	黒(内側)	變、内側不規則	1/20	

出土遺物観察表 瓦類

番号	出土箇所	種類	法寸	調査	性質	既存	既存	既存	既存	既存	既存
69	7層	女瓦	(14.0)	(7.0)	2.5~3.0	斜面タコ・弓張通路 斜面タコ・弓張通路	NB/底 NB/底	只(底質・數)	只(底質・數)	只(底質・數)	只(底質・數)
70	7層	女瓦	(7.0)	(3.0)	1.5	筒型の回った様子の 斜面タコ	B1/1.5cm B1/1.5cm	只(底質・數)	只(底質・數)	只(底質・數)	只(底質・數)
71	7層	女瓦	(12.4)	(7.5)	2.4	ナメ(重)	右片 左片	只(底質・數)	只(底質・數)	只(底質・數)	只(底質・數)
72	7層	男瓦	(25.0)	(12.0)	2.7	筒型にナメ(重)	右片 左片	只(底質・數)	只(底質・數)	只(底質・數)	只(底質・數)
73	7層	半瓦	(22.5)	(24.1)	2.5~3.1	斜折アタキ・横カキ口	右片 左片	只(底質・數)	只(底質・數)	只(底質・數)	只(底質・數)
74	7層	半瓦	(22.0)	(25.0)	2.5~3.2	斜折アタキ・横カキ口	右片 左片	只(底質・數)	只(底質・數)	只(底質・數)	只(底質・數)

出土遺物観察表 四石

番号	出土箇所	種類	法寸	調査	性質	既存	既存	
58	7層	四石	(18.0)	(10.0)	—	斜面タコ・片通路	只(底質・數)	只(底質・數)
59	7層	四石	(18.0)	(10.0)	—	斜面タコ・片通路	只(底質・數)	只(底質・數)

# 写真図版



対象地全景



1区 東壁

写真図版 2



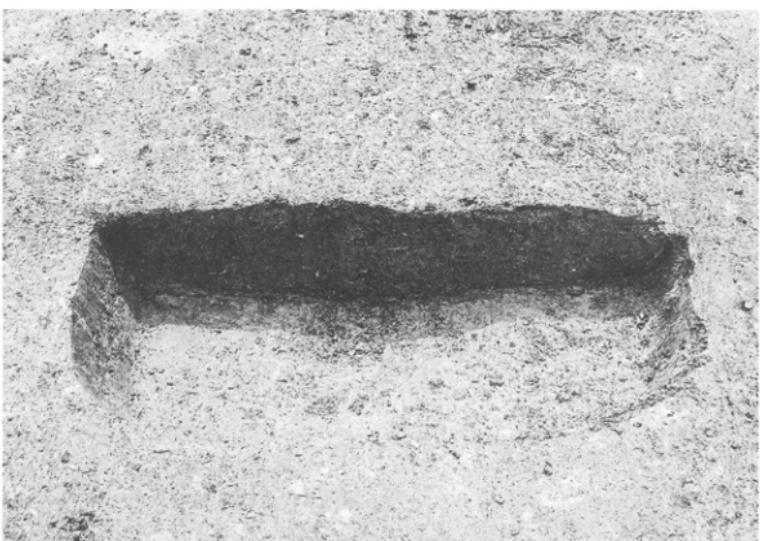
1区 完掘状況



2区 完掘状況



SK2 東壁



SK4 東壁

写真図版 4



図12—No.65 出土状況

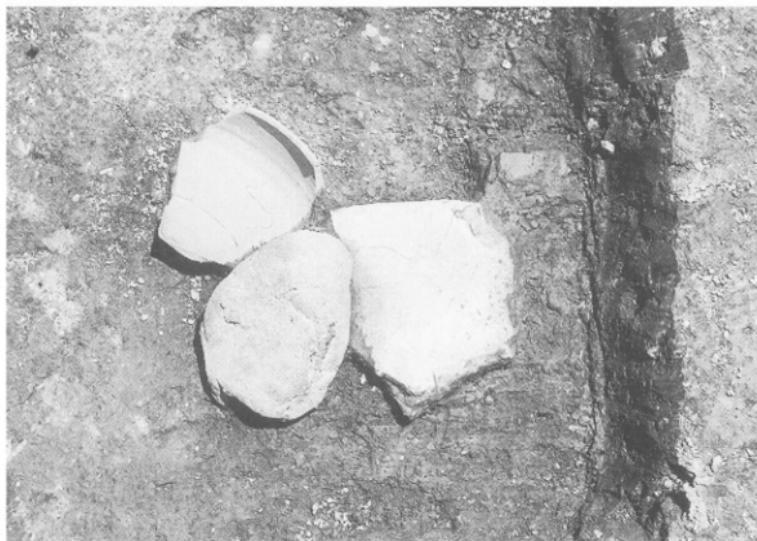


図11—No.55・図12—No.58 出土状況

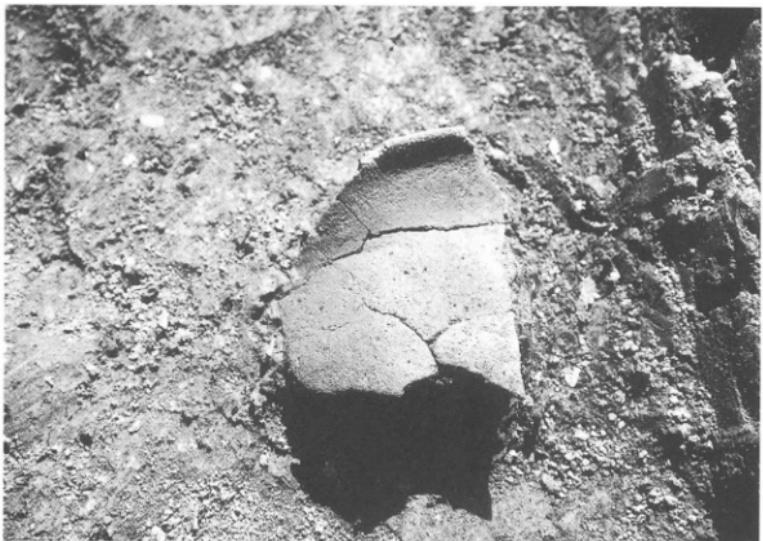


図12—No.64 出土状況



図11—No.56、図13—No.69・No.73 出土状況

写真図版 6

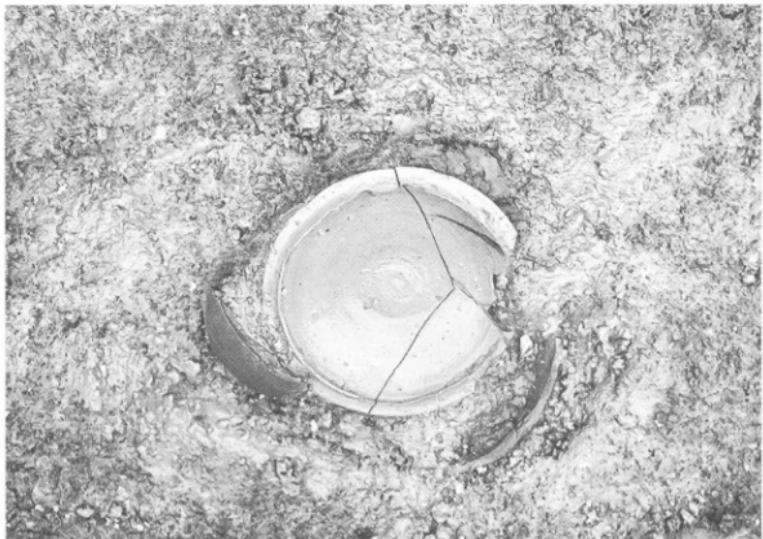


図10—No.23、No.24 出土状況

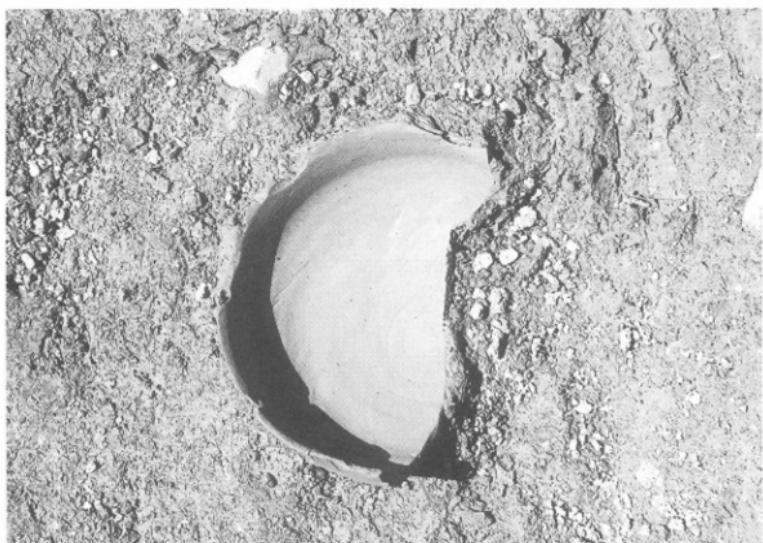


図11—No.40 出土状況

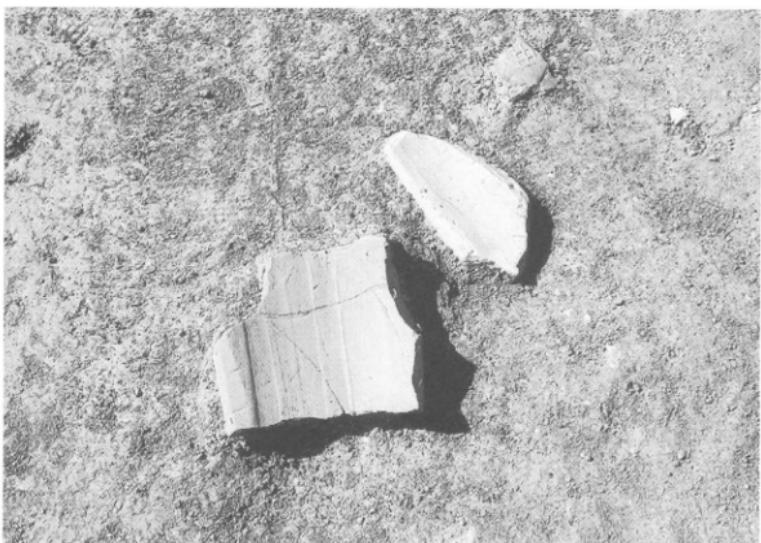
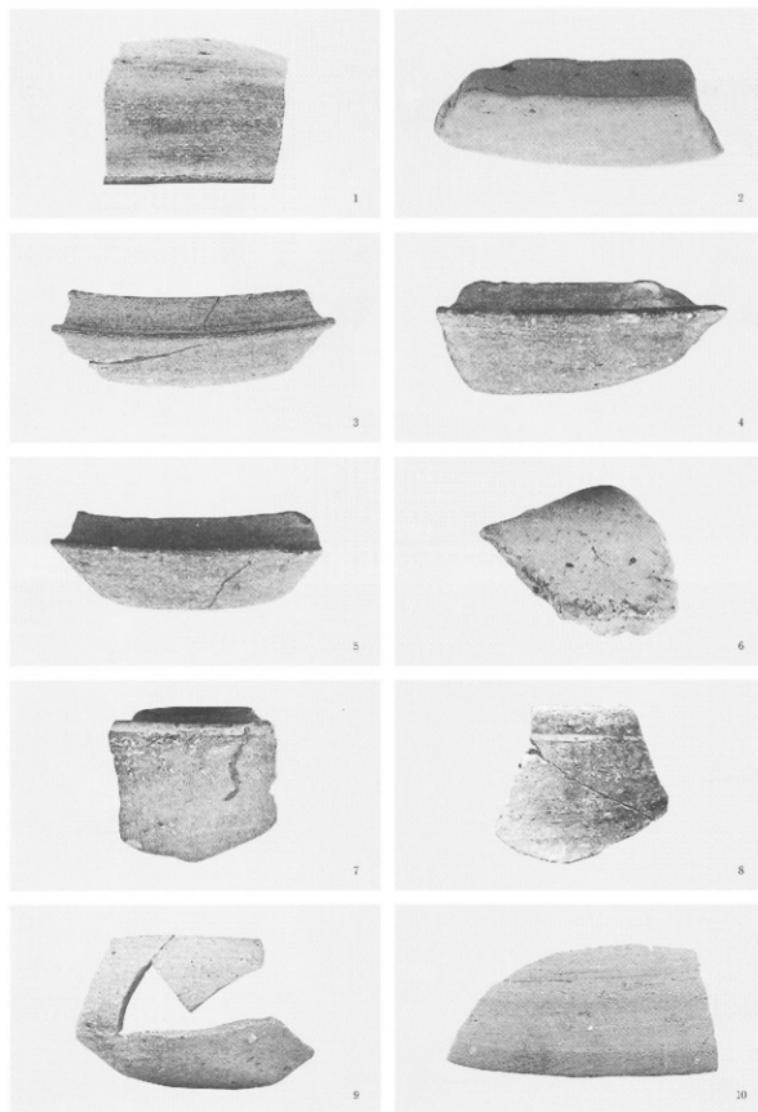


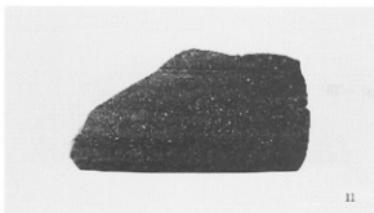
図13—No.72、No.74 出土状況



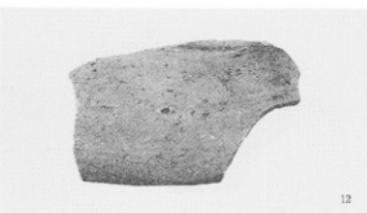
SK3 (図10—No.18)・P2 出土状況

写真図版 8

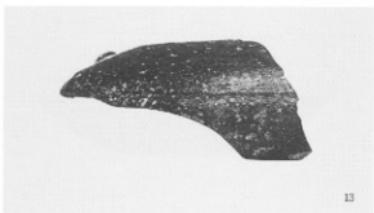




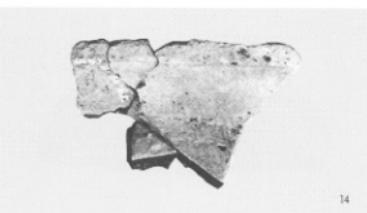
11



12



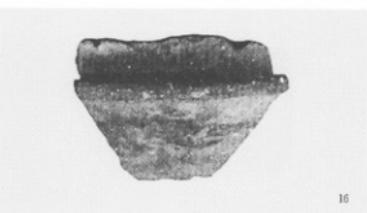
13



14



15



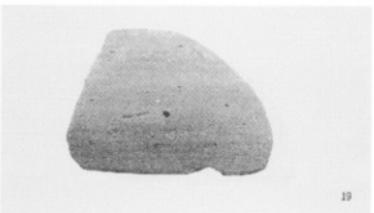
16



17



18

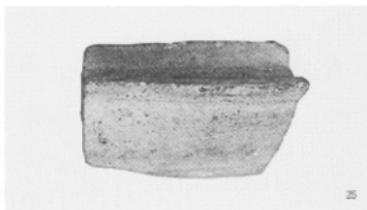
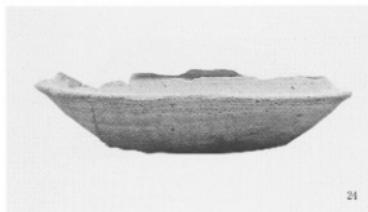


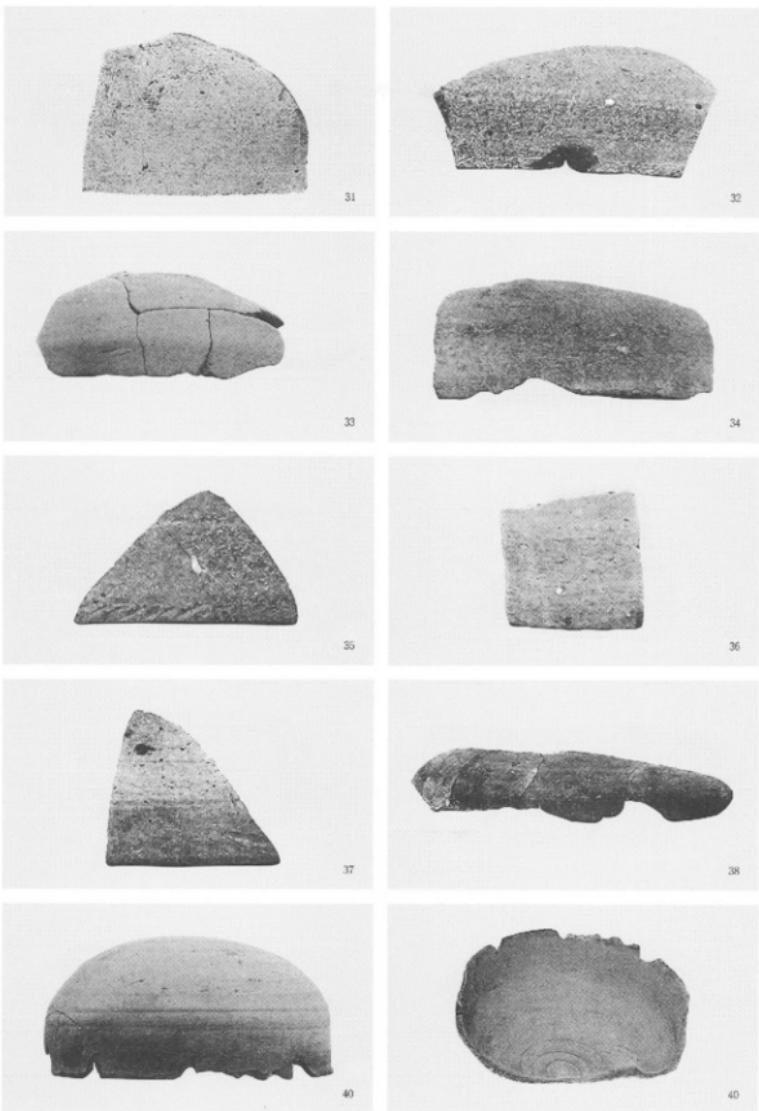
19



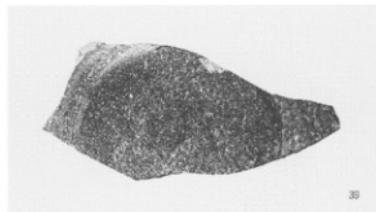
20

写真図版 10

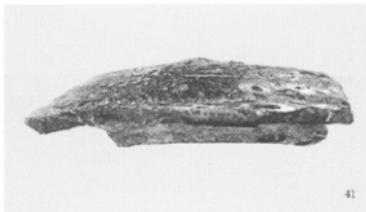




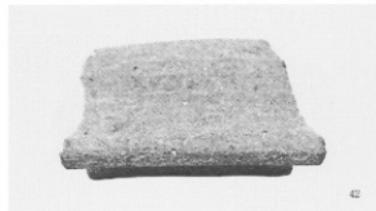
写真図版 12



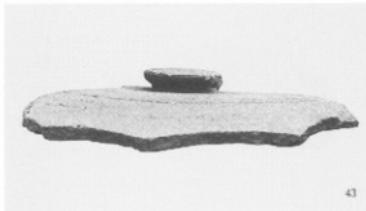
39



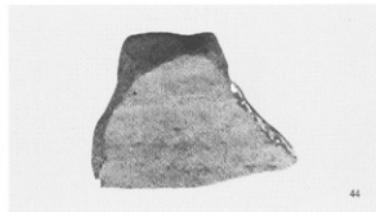
41



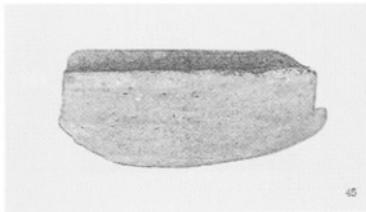
42



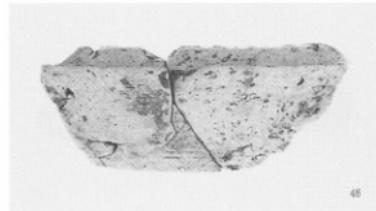
43



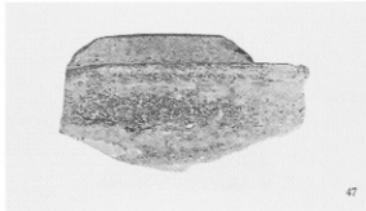
44



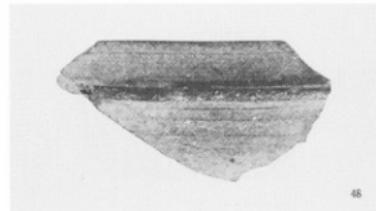
45



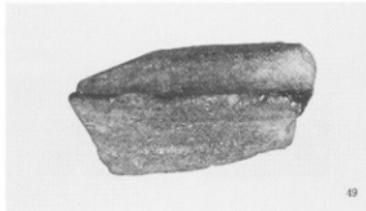
46



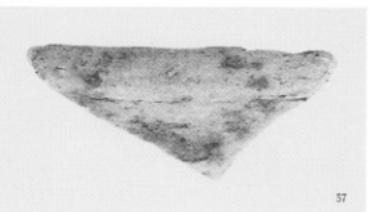
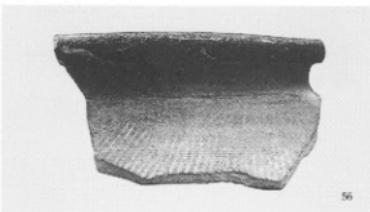
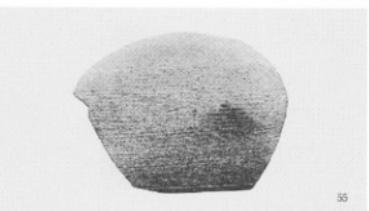
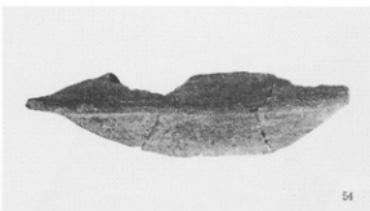
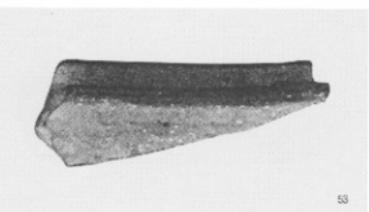
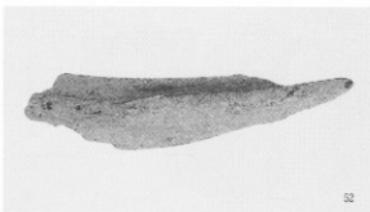
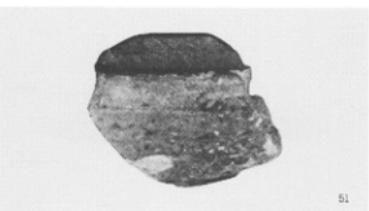
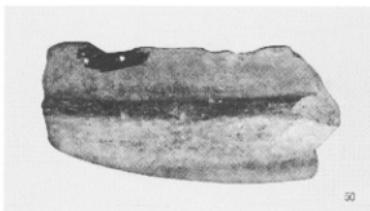
47



48



49



写真図版 14



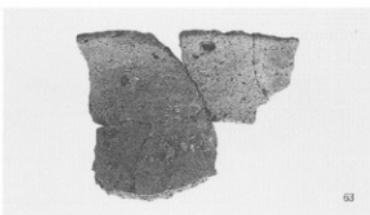
60



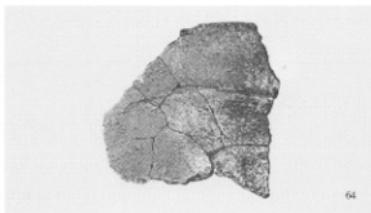
61



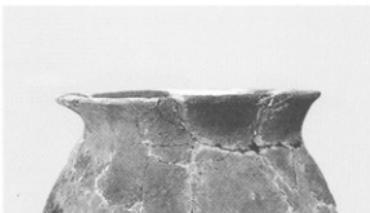
62



63



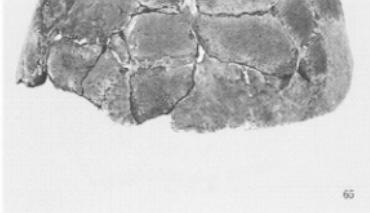
64



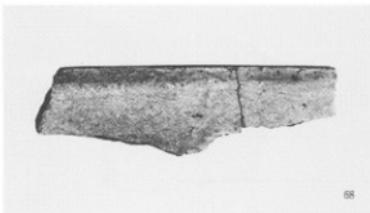
65



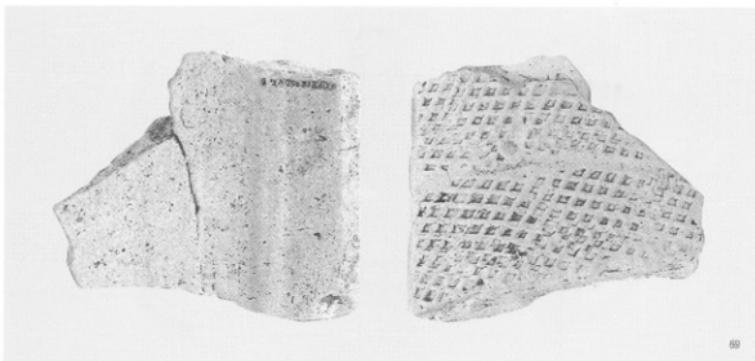
66



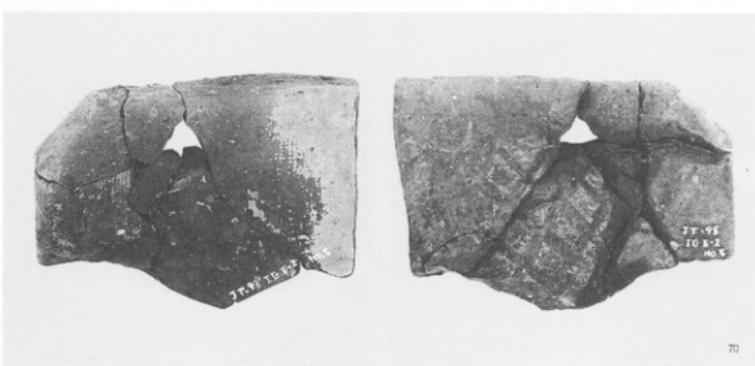
67



68



69

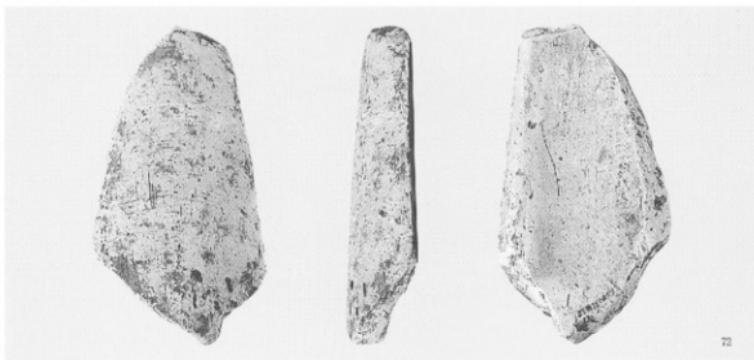


70

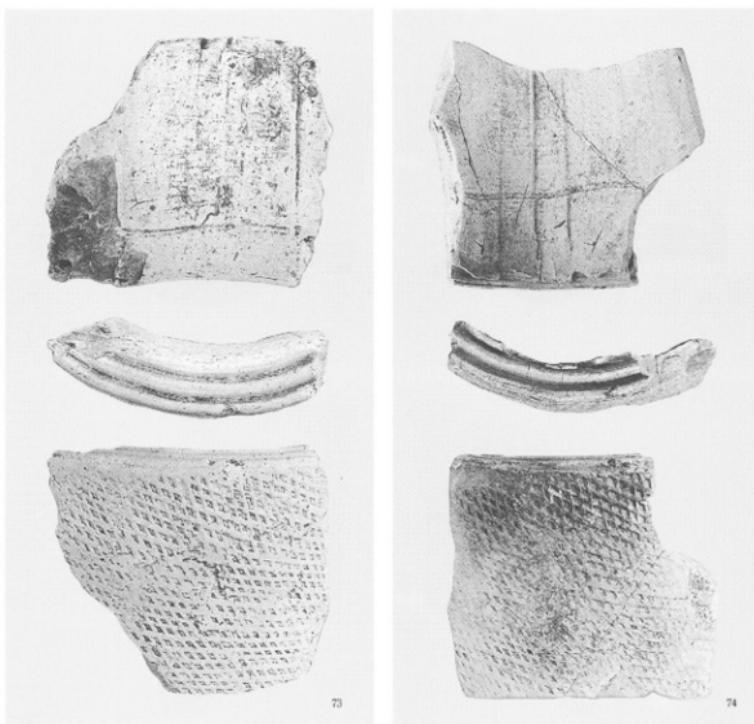


71

写真図版 16



72



73

74

## 附 高知城北側外堀石垣の調査

## 高知城 北側外堀石垣の調査

### (1) 調査の契機及び調査の経過

高知城跡は国の史跡であるが、指定されている範囲は大高坂山と周辺部分のみである。周間に設置された堀は現在かなりが埋め立てられ、原型を留めているところはほとんどない。そのうち、今回調査した城の北側部分については、各絵図等をみても江ノ口川を利用した堀が存在するだけである。そのため、これは内堀・外堀兼用のものであり、また河川堤防(護岸)の性格をもった施設とも考えられる。藩政期の江ノ口川は、北岸に所在する尾戸の小丘のため今回の対象地付近で南に大きく屈曲していた。現在のような直線的な流路になったのは、大正13年から昭和元年にかけて川の汚染を改善する目的で改修が行われた後である。その際旧流路部分はそのまま埋め立てられたため、石垣は破壊を免れたものと考えられる。現在は石垣の上部1m程度が所々で地表から顔をのぞかせている。

今回の調査は、高知県警察本部の新築に併せて都市計画道路高知公園線の改良工事が行われたことによる。道路改良工事に伴い、江ノ口川に架ける新橋(高知城橋)の工事に支障があるため、既設下水道管を若干移設する必要がてきた。下水道管は市道の地中に埋設されており、工事箇所においては地表から石垣は確認できない。しかしながら、市道の両側に石垣が現存しているため、工事箇所においても石垣の下部は残存していることが予想された。このことから、橋梁工事の主体である高知県・下水道工事の主体である高知市と高知県教育委員会・高知市教育委員会の4者で協議が行われた。その際、高知県教育委員会より、当該地は史跡の指定範囲ではなく、また周知の埋蔵文化財包蔵地にもなっていない(郭中参考地の扱い)ものの、藩政期の石垣であることは明白であり、工事前に記録保存のための調査を行うことが望ましいという見解が示された。これを受けて、橋梁工事の事前調査は高知県教育委員会が、下水道工事の事前調査は高知市教育委員会がそれぞれ実施し、費用はそれぞれの工事主体である高知県・高知市が負担することで意見の一一致をみた。なお、橋梁部分の調査は平成10年6月18日及び同年7月28日の両日に行われた(報告書未刊)。

今回の調査(下水道部分)は以下のように行った。

調査期間	平成10年4月30日～5月10日
事業主体	高知市下水道部下水道保全課
調査主体	高知市教育委員会社会教育課
(現地調査)	田上 浩(同課指導主事)
調査箇所・面積	高知市丸ノ内2丁目5-1先、約3m <sup>2</sup>
現場掘削・石垣表面洗浄	株式会社 フタバ

### (2) 調査の手順及び結果

当初の予想通り、既設水管の部分以外は石垣の下半部が良好に残存していたので、予定通り

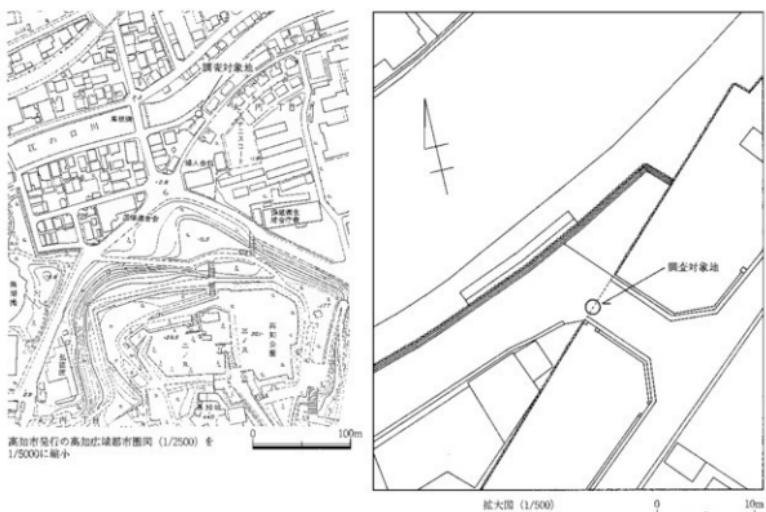


図15 調査対象位置図（広範囲の図はP.2の図1を参照）

に残存部分の調査を行った。手順としては、最初に工事区間の全体( $22\text{m}^2$ )について、石垣部分を残して前面及び上面を掘り下げ、石垣部分以外への矢板うちなどの安全処理を行った。その後に実測図作成及び写真撮影(正面・側面)を行い、それから工事部分の石垣を取り外した。この後、雨が降り続いて石の隙間からも水が多量に流れ出す状態になり、崩壊の危険が生じたため石垣部分の側面についても矢板をうつ必要が出てきた。そのため当初予定していた石垣下部までの断面図は作成できなかった。また、石垣の下から胴木の一部を検出したが、これも実測はできず、写真撮影のみに終わっている。また、撮影した各写真は、工事の対象面積が狭かったために正面からでは撮影できず、かなり角度のある上部からの斜め写真になっていることを断っておく。同じ理由で、石垣の実測図も写真測量は利用できなかつたため手測量のものとなっている。

今回の調査で新たに確認できた事実は、胴木の検出である。他地域でみられるものと同様に、河川や堀等低湿地の軟弱地盤の箇所に設置された石組み等の構造物が、沈み込むのを防止するためのものと考えられる。調査対象地が狭かったために全長は計測できなかつたが、径15cm程度の材を平行に2本並べたものである。石垣表面の石材は主にチャートであった。また、裏込めの奥行きは1m程度はあると考えられるが、対象地外に延びていたため確認はできなかつた。遺物は出土していない。

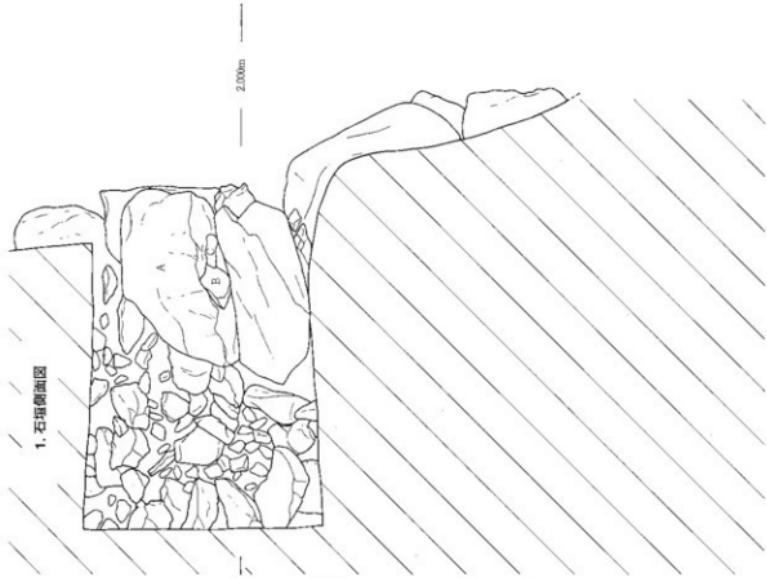
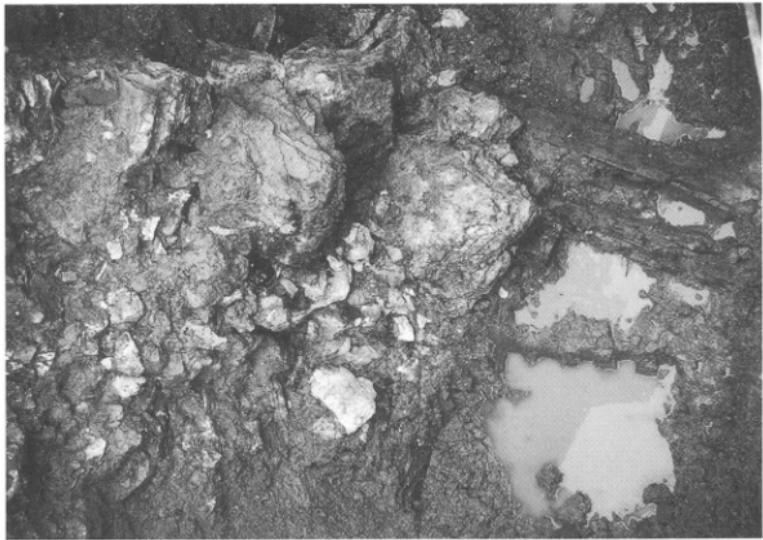


図16 石垣側面図・正面図（縮尺1/20）

# 写真図版



写真図版 18



石垣撤去後側面



石垣撤去後全景